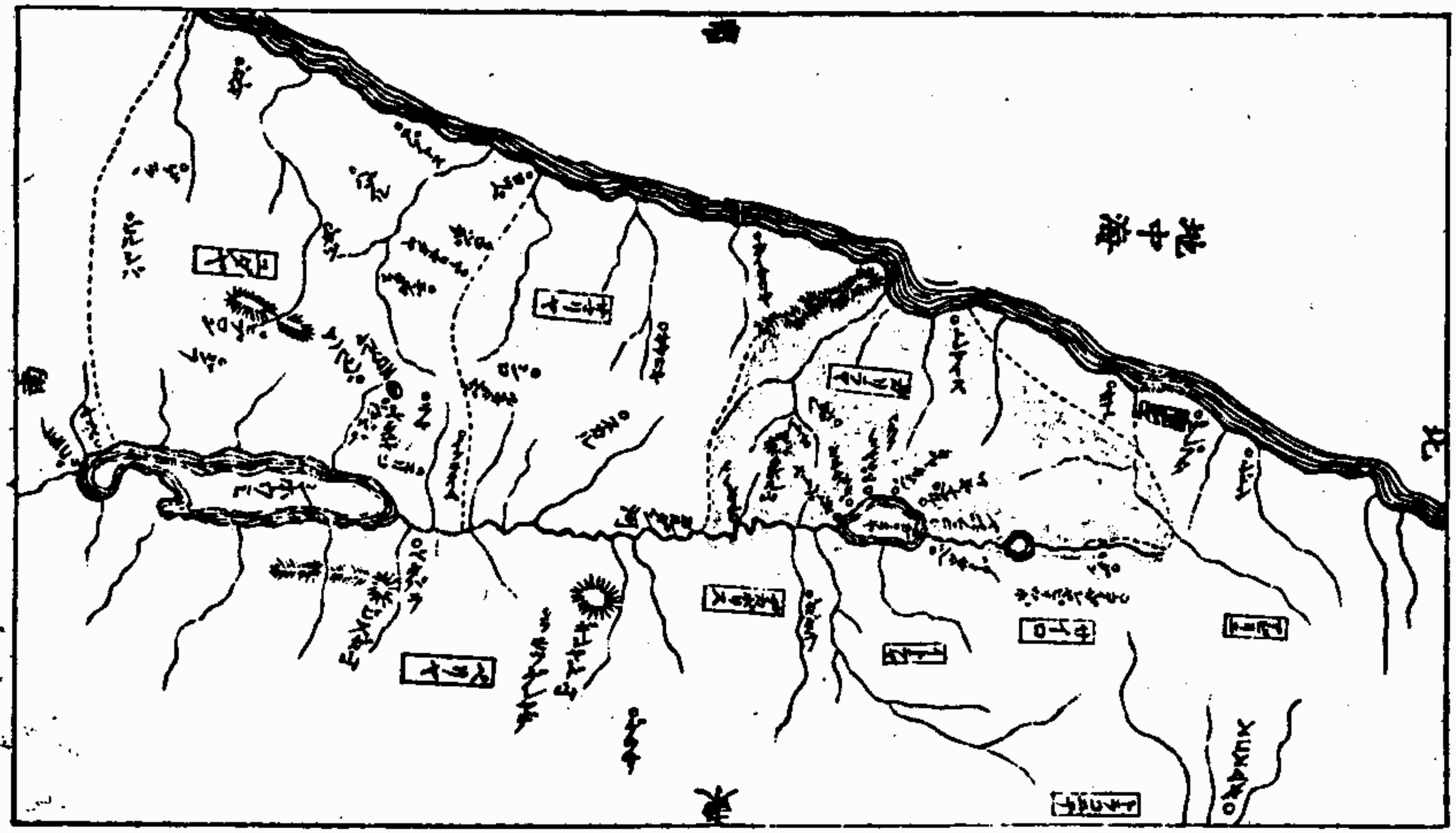
書馬太傳



新約聖書巻之一

馬太傳福音書

第一章

一 アブラハムのもゝゝダビテのもゝゝ耶蘇キリストの系譜

二 アブラハム イサクをうみ イサクヤコブ をうみ ヤコブ ユーダとその兄弟とをうみ

三 ユーダ タマルのゝゝにパレスとザラをうみ パレスヱスロンをうみ ヱスロン アラムをうみ

四 アラム アミナダブをうみ アミナダブ ナソンをうみ ナソン サルモンをうみ

五 サルモン ラカブのゝゝにボーズをうみ ボーズルツのゝゝにヲベデをうみ ヲベデ イエッサイをうみ

六 イエッサイ ダビテ王をうみ ダビテ王 ウリヤの妻のゝゝにソロモンを

七 うミソロモン ロボアム とうミ ロボアム アビア とうミ アビア アサフ とうミ アサフ
ヨサパテ とうミ ヨサパテ ヨラム とうミ ヨラム ヨジヤ とうミ 九 ヨジヤ ヨアタム とうミ
ヨアタム アカズ とうミ アカズ エセキヤ とうミ 十 エゼキヤ マナセ とうミ マナセアモン
とうミ アモンイヨシア とうミ 十一 バブロンとうつされるまでのちイエコニヤ サラチエル とうミ
とその兄弟 とうミ バブロンとうつされるまでのちイエコニヤ サラチエル とうミ
サラチエル ゾロバベル とうミ 十二 ゾロバベル アビウデ とうミ アビウデ エリアキン とうミ
ミ エリアキン アゾル とうミ 十四 アゾル サドク とうミ サドク アキン とうミ アキン
エリウデ とうミ 十五 エリウデ エリアザル とうミ エリアザル マツタン とうミ マツタン
ヤコブ とうミ 十六 ヤコブ マリアの夫 とうミ ヨセフ とうミ この マリア より

キリストとなる耶蘇うまれたまへり アブラハムより ダビデまでの歴代をべて十四代まこ ダビデより バブロンにうつるまで十四代 まこ バブロンにうつりてより キリストまで十四代なり 耶蘇キリストのうまれたまふことさのごとしその母マリアヨセフと契約して ていまだとゝのをらざるに聖霊に感じてやどる ありくれがその夫ヨセフはたゞしき人なれバこゝろをあらはさんとおもふ離縁せんとおもひくして しかるこゝろをのそふ時に主のつかひ夢のうちにあらはれていひけるハダビデのそなたヨセフよなんぢの妻マリアを

めうとおそろしないふるまひをしてハ聖靈ゴ
ふるひなりしかど子とうまんそのの名と耶蘇ゝおつくだ一うと
その民とそのつくりくんとをもだおりそのことハ
預言者よりて主のいひこしたまひしこと
そ子とうまんその名とヨシヲゝといひしこと
てんあるりその名とけだ神さまにあるものいとなり
ヨセフ目さめてさ主のつかひの命ぜしごとくしてその妻
とりくりしが五初子のうまるまで交合しなくして
その名と耶蘇とぞつけり

第二章

さて耶蘇はヘロデ王のころユダヤのベツレヘムにうまれたまへり

こゝに博士たちひがしのくにより

ユダヤ人の王こゝにうまれたまひしものはいづこにおはすやこの星

らいぎしのくににてその星をみるとき我らもまをさんとて

まゐりたるなり

ヘロデ王これをきゝていたくまどへりまた

りさべてエルサレムの民もみな

まどへり

ときの祭司のかしらたちとあつめてかれ

にかれはいづこにてかるやをうまるべきや

ユダヤのベツレヘムなりそは

ちのもとにかくこそ

ユダヤの地ベツレヘムなんだ ユダヤの郡中にそいてらくさきの
よあるどいうこと きまバとぐ イスラエルの民とやなんべき君その
ちちりそんというりこにおいて ヘロデのそふくせたちとび星が
のあるこれ ーーーとくくーくくひくまるとベツレヘム へつくこと
さんとそいひるハゆゑて 嬰兒のそのとくくーくたづねてこれ
よあるこ まきもきゆゑそこれと 拜せん あるこアこれつ
じんうきる 王の命令 とこてゆりうこのくーのうたて 見ー
星うきるたこ さきぶらとるる子のところまでゆきそこその
うてこまきうこの星とそこまるびこたえるとそこ

家こりとゝるごのその母マリアしゝとゝにとゝとゝそひゝ十
とゝるごこと拜ーそのたゝのゝとゝひゝゝき禮物黄金乳香没
藥とゝゝげゝりゝゝゝゆゝゝロデへうつゝゝれしのつゝげとゝう
ひりてかゝのゝゝゝりゝゝゝりてのち
ゝゝ主のつひヨセフのゆゝゝゝゝれていひけるハヘロデゝとゝゝゝ
ごどゝゝゝゝ

げんしやこうそ主のれアラブ子とアイグプトよりよびいだしたるに（ロデ）こうそ夫ふたりをもつてのちにかれらをもつてべツレヘムにそのさいひのうちなるところにとどまりたるなり

ヨレミヤのいつくられたるなげきかなしみゆゑにラケルそのこどもどもとなげきまどひてなぐさめどもいとひーこうそつりへ（ロデ）死ーんとバこうそ主のつかはされていひけるハおそれ

ハアイグプトそゆゑにヨセフこ嬰

兒とその母とをつれて イスラエルの地よりゆきてもとのところに
ひるものハくゝや死せり[二] そのくらいおそれおそれその母とふた
たびイスラエルの地よりいでゝ[三] アルケラヲその父ヘロデにかはりてユダヤの
王となりたるよしきゝそこゆくことをおそれたりまたゆめにつげとなりて
ガリラヤのうちにさりて[三] ナザレといふる所にすめり
人となづけらるゝことあらんとかねていへるもの
なり

第三章

そのころ洗禮[せんれい]とさづくるヨハネ[よはね]ユダヤの野[のゝ]にきたりて

びゝるゝ天國ハちゝゝゝ

とさるとなんぢよりあり
ゝそどやハさまゞ悔あらたむ
るよりのごとき實をひとゝ九ゝ
ゝまつりの先祖ゝアブラハムありと
いふことをろろよりなれいくもあまバまなんぢら
ゝんゝ神ゝくこの石ゝとてアブラハムの子とあゼバ
斧ハ樹の根ゝよりるをべてよき實とひとゝわ樹ハきれ
て火ゝよりなげいまるるまれハなんぢらのくひやらむるまい
て水ゝとてゝ汝ゝらゝせんきとさづくまきりのらゝきら
んりのハまゝまきれてまれハその實とゝたまゞそその
人ハ聖靈ゝと火ゝとてゝあんぢらゝせんきいとさづけんその箕と

その手よりてその庭をきよめてその麥とあつめて庫に入れそのうゝとゝえざる火をそやくべし十五 耶蘇ヨハネ子よりて洗禮をうけんためにカリラヤより ヨルダンにきたりたまふ十四 ヨハネ子いなをとゝめていはくわれ主よりせんきをうくべきものなるに汝われにきたりたまふやと十五 耶蘇こたへていはくいまゆるしてよかるべしこゝにわれらすべてのたゞしきをハつくすべしゆゑに耶蘇さんきをうけ

とうの水よりあがりしに天ひらけ

神の靈鴿のごとくくだりてそのうへにとゞまるを

ゑて天ん[illegible]ゑありてこれハさきに愛子
なりしゆゑ

第四章

そ耶蘇はくまにこころんために聖靈に野のうち
ひとわたり四十日夜も食ぞのら飢こゝろうる
をのうまとてゐひるハなんぢゝ神の子ならば
この石をぱんまるまと命ぜよ四こゝろゐひけ人
人ハぱんのみにていきるぞと神のくちより出るすべてのことば
によりてくまとみをこゝろまめ殿

のいくさにてそいひけるハあんちゝ神の子なるハ身と
あげ名をいとゝあまハやんちゝそのつハものち命
ト たゝまつて足の石コ宮ねやうよその手をそなんちとたを
けんとゝとるゝれうゝ耶蘇れいハひゝハ手うなんちの神ところ
むべゝきゝとるゝれうりハちくきまゝとゝいたゝきゝ
山コつまゝ世界の國くくとその榮とゝをそれんち
を拝さバこまゝとゝる拝さバなんちゝ
ゝんといつゝこにおいて耶蘇うまゝこいハけるハサタナのひ
ゝ主るゝんちの神と拝しゝでそまゝこつゝとゝるゝ

さられバ[十一]やがてあくまうまれとくるうらよついら
ゝとうとうとう

のうみべとあゆこぺテロしいシモしてその兄弟アシデしてり
海にあそこうつところに於て漁師ものなりたもも
よいひしりハ是ニ人とれなんぢと人とをもてこれ
とあそん三まゝやとあとをそれこと三そのこと
ろりをそこみけふりの兄弟ふりゼベダイの子ヤコブと
その兄弟ヨハネ子父ゼベダイとともに舟よりあとをつてとて
まつとをばゝまゝやて舟と父とおよそて耶蘇
ヨとをぐう三耶蘇ガリラヤとあまねくめぐりその會堂
ヨイヤ天國の福音とをとをとをとをとをとをとをとを民のうちを

のやまひとべのまづしひとびとやせり四 その評判おもはくスリヤ
よのうまれつきまづしく人びとをうばひてうばひてまづしくのやまひ
まづしくさとりやむものもひハ悪ユダヤの狂氣難
癒のやまひとかまとるものとうれしうまとかまとるといや
やり五ガリラヤとデカポリユダヤヨルダンのむこうよりおほくの人び
とをとりこ

第五章

耶穌おほくの人とともに山よりのぼりたまひしそのて
たちにこをねがはくハ我らをとひたまへ

ひとゝ三ものゝうちにつくるものゝはさいとひまるものゝなりいと
とゝれバその人の國ハ天國なゝゝ三ばかりかゝむものゝはさとひ
ゝゝものゝなりいとなれバその人ハゝゝくあとうくづきものゝ
ゝゝ三ハなり五彩和なゝゝものゝハさとひまるものゝなりいとゝ
バその人ハ地球とそひくづゝをゝゝ三ばなり六飢渇こゝ
たゝしゝとゝふものハさとひまるものゝなりいとゝゝ三ばゝ
その人ハ盈らゝくゝゝものゝなれバありとあゝれむものハさゝひ
ゝゝものゝなりいとなれバその人ハあゝれとゝくゝゝものゝ
ゝゝ三ゝなりハゝゝものゝゝゝいハさとひなる

ものなりいくさなれバその人八神ゆゑきものあるべからず

九 和睦とをむものハさいひあるものなりいくさなれバその

人八神の子ときとらるべきものあるべからたゞしきこと

しあゝせあくまものハさいひなりいくさあるべきバその人

の國ハ天國おなじバなりなんらとのとりちきゝ

いくさをさまりくのあーきらといくさたなんらさい

ひあるものなりさいひあるべきバ天ようんち

らのごとひおかけるべきバなりあんらさいのもの

ものあるべからたゞしきものなんらハ地のとの

ありもてゆくとのあらくひとうしなくいそぐそのあらくかくてんその從ハたゞそこに　そこれ人ゞゝまきのかゝるやくにてゞなんゞハ世のひゝゝり山のうゝまたて城もかくゝゝとゝゝゝとあるゝゝとゝもゝてこゝゝと斗下よおくゝのかゝ燭臺ゝゝゝゝて家ゝゝあるゝゝべゝのものとてゝゝゝゝり天かくのごゝくひゝぐのまゝゝなんゝゝゝひゝゝとかゝゝやゝゝゝゝん人ゞゝなんゝゝゝのゝゝゝゝこゝゝゝひゝゝゝて天ゝゝまゝゝゝゝんゝゝの父ゝゝゝゝ

さてはかれ六きまりにてんぐ
つたつぐん天地のつくらら
おくそのいち點一畫も遂てくもぐ
てそのべくしだいゆるる
らのいきめのいろそらひさ
ひとやづりてくく人こと
ものハ天國よりおいていたりてらひさきをのいくもんおそ
こをよてく人ことゆるものハ天國よりおいてこともとおひひる
ものといくべー千ひとなんらたつぐんなんぐのくだーさ
ことぐくしやとパリサイの人のたくさくそれぞんぐ
うるおそ天國よりいくくらかるなぎ三いくの人ころろ
そなれきいくろとものハ審判さきあづくんしいひーこと

なんだうめとうしゝとうなり[三]ゝとうぐゝとうさきなんだゝゝ
つぐんきつてゆきとうそのあにとるものハさぐきにあづ
うべ〳〵きゝこそのあにとうかゝいとうのハ評定[四]あづうべ〳〵
きたくのものゝハ地獄の火にあづうべ〳〵[三]ゆきに
なんだうをゝそうのと壇[一]たづうくそくすそ兄弟のうんだう
ようついそくそうとおひいふさばかう[二四]檀のきくうのと置[五]
ゆきそきまづうんだうの兄弟とありやゝぶゆきうくらきうり
てうんだうのそうきのとあびゝ[五]なんだうとうつくるものし
つきぶうちそゆゝくきくやゝゝげゝおそゝくハうつゝ

ゑものあんぢとたべやくにまーもぐやくあんぢとたべの様
人ゴとくーて　あんぢハ　ゆゑ　まこになんば
ゴつぢん分厘まぞもつくのくぞとんバうるぞそとづくー
ゐーとべ　一の人ゴ　淫をるあれといひーくまんぢくの
くーーくろくろなりたーあぢくまなんぢくにつぢんおと
そ色情とりけてとんおとなぢむるのハくろのうちゃ
淫せーゐりくー　右の眼をんだちとつくにおくさばぬくぢで
てえれとをちくまるまバ五體のひくつとうーなくくく
全身地獄ゴよゐぢいまくれんゴハまくれりを　右の手波と

つたにおしさバうとをうてをそいうまをバ五體のひと
つとうしなハ全身地獄ニおちるげいまをれんこハまをろ
まを人をその妻といづをさバそをに離縁ぢをうとをもをべしと
をれどををんぢをつぢん淫事のゆゑをもどをそのを
つををいぢとものハをを淫事をもをしむるなりまをいづを
ををるをんをとをもをるをものも淫事とををとなりまをいろ
ををのをちひとををとををれ主ニなんぢのをちをとを
ををとをぐバーをいををの人のいひーとをんをぢをの聞
ーををををりををれどををんぢをにつぢんををーにに

ちうとうとあれ天ときてちうとうとあれこま神のこくうゐ
あまバあり地ときてちうとなれこま神の足ぐゝんば
なり王ロソルマとさーてらうとあれこま大王のあこあまぐ
ありやなんだのかーらとさーてちうとなれこま)ひとまぢの毛
ぐまくろくきこちろくちるあくぐれバありなんぢら
のうとぐとちろくいゐくとこまとりそぐるくあしーさうり
いづるあり目とつくの目歯まて歯とつくのくとうひー
とあんぢくさーとうあり(元)れどうまあんばらにつぢん
あーさゑ敵たくぢるあれ人あんぢの右の頬とうバ左の

類もうれしくひけば早なんだと詫て持こし衣と
とんとそのまくうちかけこしらせさ
四人なんぢよ一里の公役と強おどかしもに二里
ゆけよ四三なんぢよりもむこうきのよあること借んとする
きのよハいるむあれ四三隣りといふくそあぢ入とう
らむ下しいけとなんぢーーーこそろだり四四されど
つまなんぢにつぢんなんぢのあぢ人といふくーみ汝えぢ
らとのそよをのくたあよさいふひとねがへなんぢとう
らむるものようさうとなーなんぢーよさくすのと

せむるものたちまちいのちをさるべしなんぢ
らの父の子なるべいふとなるまばその日とどまるものを
もあしさまものをいとてこそ雨降とてただ
うしぐるものとんたうこそたまこそいつく
しむものといふくまぐなんのむくひあらんやうつぐとり
もかくさきぐらんやと安否と兄弟のうにぐぐあん
のまれることわんやうつぐさとりもらくなるでらんや
四八さらばあまきまとなんぢらの父のうちをつくをが
ごとくなんぢらもうさとつくをべし

第六章

なんぢらのたゞしきを人ゞに人のまへにあらはすことをつゝしめよそうしてもしそんぢらがもしまことを汝ら父ちゝのむくひとえどこーとだにゆゑなくばなんぢらのうけるべきむくひをうしなふなり

ゆゑにあなたが人にものをあたへるときにはあなたの前にラッパを吹くな偽善者らが人からほめられんとて會堂やまちまで偽善者らの風聽をうゝなくなどしたまふごとくなすなかれまことにわれなんぢらにいふなんぢらほどのうけをすでにうけたり

なんぢ施しをなすときは右の手のなすことを左の手にしらせるな

えたまへなんぢの父いめしくに
五 ゐんぢゑむひたまへん
いのちさに偽善しやのごとくなるなれいふとあるべ
きこゝハ人ゑうゑ會堂やまちの隅ゑたちて
いのるとこゝろにつゞんゑまふそのこゝろになんぢらに
むくひとうけたなんぢいのちさに室ゑいりぢこうりて
うれうまいまとゑんちの父ゑいのまかれへうるこゝろ
ふゑんどの父ゑあらくふなんぢらゑむくいたまへんいのる
異邦人のごとくくりかへしごとをいふことなかれいふと
あるべハうまてハうまでおもへばきゝいれたまふべきなり

ぶもようまつりにならふことをあれいふもとハ沒ら
の父ハねごろぶるさとたなんぶのなくてかなぐぶりの
をもりたまつり九 ゆゑ左のごとくなんぢらいめるべし
天よりまとりたまつの父ハわがくハ聖名とあがあ
させたまく十 神國とちづうせたまく聖意と天よりなとと
ごゝ地もあさしあたまく十一 つまつの日ぐの糧と十二
今日もさづけたまく十三 つまつがくの人のつまとゆたとごとく
つまつのつまとゆゆてまく十四 つまつとろとらろ
こゝにこちびさゝまとど、ゝ(ゆ)て惡ちとちひいぶ

たまへ國し權と威光といはるるものぞうなくもちたまふ
をのおのこバなり惡孟西いふとおもこバをもてなんぢらひるの
つくるゆゑに天王まもりなんぢらの父母をゆる
したまふん十五もしなんぢ人のつくるゆゑにバなんぢら
の父母をゆるしたまふ十六なんぢら禁食をる
べき偽善しやのごとく憂さるまとをもおれいふとおもれど
まことハ禁食と人にみせんとあるいろとをつくるなり
まことになんぢらにつげんまことハそのむくいをうる十七
さうなんぢ禁食をするときにかしらにあぶらをつけ

ゆくとゆくべーさとれば人さんらの禁食はあらくまを
しそかくれらまきーまとゆんだらの父よあらくまんまし
かくれたくまこまらなんらの父あらくまにゆんらよむくひくまふべー
地ちとたくくまるこまれるおらち蟲くひ銹くまくらり
ゆくと人うらてゆくもむくまらゆり天よくまそたくくまをたく
くまふべしまとるらち蟲くひ銹くまくらゆくと人うらてゆくまき
ぞくまくまらゆなり三いくふくまバゆんらのたくまくのあるくまくまら
くまこまくまらゆくまきくまゆくべしまき身のひくりハ目ゆくりゆ色よ
ゆんらの目ゆくまをくまくゆくまかなくまバゆんらの全身ゆくまくまかなる

べーせん[三]の眼をもてあつかへば全身くまなくゆえ
よるんぢのうちにあるひとりきしくまのバいけだくり
ぞ[四]人ハふたりの主なつてることとあるくまでいふと
あまバこれとまくみまきといくごこれともくみ
まをとうもべげまバありえんぢ神とたたるたる
つることとあるくまど[五]このゆえるつまなるんぢたつ
げんめちのまなることのまきハ身の
たあまとあるんとおまひまづふなれいめちハ糧
ちりまきれるものあらさるの

二六 そこの島とおりひさよいとなしバ蒔ぐど倉に
くくくさどされども天の父ハこれをやーなハ
たまふなんぢハそれらいとそこそこのあるどや
二七 なんぢらのうちふれらおもひづまてそのいのち尺ばかり
くくのぐるごとをえんやまこさかあるよゆえ夜のこをお
もひまづくやの野の百合のいかにそぶつくくくさをそまハ
つくあぐど紡がどやしぐどうれしあんぢらにつぐん所モシだる
りそのくさべての榮よこの花のハくるのハくくくもハぐりく
二八 神ハ野よありて明日爐よなげいまくくく草

ごもくくしてなんぢらやあ汝らを
信仰(しんかう)せさせたまへばまことに食ひものと飲ものと衣(きぬ)
とそなりひとづくしこれ三こうふ異邦人のことと
ひとりのなまじバだりまんだらの天の父ハふかそのものとく
てかみくぐつまへバなり三ちまつ神のまんだらくしまつ神の
國とそのこゝでしさとをもとめよさすればふかそのものを
あたゞしくらるべし三四ゆゑに明日のことおもひまづ
うへあれしうたとあまへバ明日ハおのづからそのことをおもひまづ
べし一日のあくまハ一日(いちにち)にまかせよ

第七章

あるひとがらまゐやうとなれいたと
ゑんぎ[縁起]なきひとがらじるこころのとがめとなりてとがあらべしいふ
とかくばかりまことなきひとがらとくるこころのくるべし
三おのれの目[め]に梁木[うつぎ]をおぼえどもてゑんぞ兄弟の目[め]に
ある塵[ちり]とうるやいおのれの目[め]にうつぎりのあるいそ
兄弟にはなんぢの目[め]にあるちりとこまにとこせといふ
うるをえんや偽善[ぎぜん]しやまづおのれのめにうつぎり
とぶてそのぬち兄弟のめにちりとこんとそあ

らうを見べし六大王聖ありのとあるこゝをなれまち家ぞ
のまへなるあんぢの真珠とあるぐることなれおそくく
足りてそなまことをうりうてあんぢとかくやふらん
ちりあるさうばあんぢらまんたづゝさうば
あんぢあるくん門とたづけるさうばなんぢらのひら
うをべしいうふとあれバぞうべてすむものハうけ
をのハあひ門とでくをのまくひらうべしあんぢら
のうちられうもその子鉞とりひるる石とあらふん
やまゝ鮫とりむるる蛇とあるうんやさうれバあんぢ

ちあ一さくこのあづまのとまんだらの子どもも
あるときもとたるまして天よまきまとまんだらの父はまと
ひるのようさをのとあるくぞんやゆるぐまをて人の
まんだらにあるとやうまとおりまことばまんだらもくく人ま
あるとべきこと成りこまおきさと預言者ゆまだ成り
十三せぐぐさ門ちいまよいくふとあまバあるづまいるる
ちちはのろくくその門はおれ八ありこれまりいるまの家
一十四いひまいるるちちはあのやまくくその門はせぐくそ
のちちとうまのをくなる一十五いつくりの預言者とつし

めよそれハ綿羊のすゝこまてゑんぢゝにさゝれぢゝ内ハ
あゝさ狼なり十六その果ゑよりてそまとるべゝ荊
葡萄をゝりあぐみより無花果どうんやさかくもべて
よゝさ樹ハよゝさ果とむをびまゝあゝさ樹ハあゝさをを
むをぶ十八よゝさ樹ハあゝさをひとゝをゝまゝあゝさ樹
ハよゝさくゝとむをぶゝとあゝくゝど十九をべてよゝさゝを
ぶぶる樹ハさゝれて火ゑるあげいまゝる二十ゆゑゑそのを
よゝりてそまとをるべゝ三ゑまを主やゝくゝいゝもの人
をべて天國ゑいゝぢゝ天ゑゑまゝまを父のお詔ゑ

ちくぶのハいるべー三その日主やく主の名よりて
と〳〵主の名まりて慰をてくゝい主の名まりておか
くゝてーざなるヨぐをとゐせーまあゝどやとヨれるいと
のおかりうん三そのゝさヨれうてゐんぢをちもも
あーしさをとなもものよヨれをとくゐれてあけしとれらる
いふべし四ゆゑまりをもべてヨぐかうゝだをちてそを色をおて
なまをものを磐のうゝて家をとふそるかーこを入ヨたを
天二五ありうり洪水いで風ふきその家まりあるれども
たとれどこゐ磐をいーそゐ色とそれバありう天ちぐてロが

このこゝぐとをきてをこゝぐるものを砌のうへの家をた
てるおろかなる人なりたとへんもあるべしおろか水いでかせ
ばきその家をあれはたとれてそのたとれはおろかなり
六 耶緜ゐのことばおくりたまふあるべきあるべき人ぐ
そのをしへをおどろきあくり元いふとなれば學者のでし
とゝゝゐあるべきして權威とりてるものゝぐくれら
とをぐくたまへり

第八章

耶緜山とくぐりしゝゝおくの人ぐこれるゐふ

つりニうらよ癩病のりのうちに拜していひけるハ主も
こゝろよかるべくぶられとうたまふべし三 耶穌手
とのべうまをつひてうちろよかなふこゝろくあまをとり
そのゝちうちその癩病やどうちくなまり四 耶穌またに
いひけるハつゝんで人にいうなゆめそおのれを祭
司にうをせまうまつに證據のためモーセがゝめいぜし
ものをさゝげよ百五 カペナオムにいりしとき百
夫の長うまをこゝろわづらふて六 いひけるハ主もとゝをべ
癱瘋うそて家にうちふしをるあり七 耶穌うまに

いひけるハ主人ハ百夫のかしらなるべて
いやさんハ百夫のかしらなるべて
ゆきてこゝをとゝいハあるゝとゝ
とゝが家屋の下よりいでゝ
ゝゝどもゝどゝことバをいひたまふのちにそゝがゝ
ゝゝどもゝどゝことバをいひたまふのちにそゝがゝ
ゝべハ
いあべし九そゝをゝれハ權威の下よりあるものなりゝゝがゝ
ゝゝ
ゝゝのあるものありゝれよあけゝゝゝ

ちうらくて天國(アブラハム イサク ヤコブしどもに坐
國の子どもハ外のくらきよおひいだされそこにてかなしみ
とをめきとことあるべし十三 耶蘇百人のかしらにいひけ汝が
信じるごとくなんぢらなるべしといひきこバそのときにその
ちのべハいえちり十四 耶蘇ペテロの家にいりその姑の熱病をそ
ナたるとそその手にさわりをるに熱さりぬ女おきて
てもてなしをるやり十五 日くれるとき人ぐ鬼にとり
つかれるおりのものをつれてきたりたれバ耶蘇こゝぐ
りて鬼をおひいだしやまひあるものとことごとくいやせり

預言者エザヤがもうしたひとさうげ
つまづくのやまひと飢ゝいきあたりたそ耶蘇
おのれをめぐしおろかの人ぐとそむきたにゆけと
命ぜしひとりがくしやさうてこれをいひける師ゝい
づまへめをたまふもつまとちぐくん耶蘇ゝこれをいひ
げるハ狐ハあなあり空の鳥ハねぐらありされど人の子に
ハ枕をるところなし三まさそのでしのひとり耶蘇ゝいへ
げるハ主ゝまづゆくそて父をとうむることをゆるせ耶
蘇ゝまことにいひるハまことちぐく死したるものこそその死

しるまをとくらひしやと三耶蜘船このうーにその
でー
いらこれるとも四ろと船をまそおくまんしふかう
ごくさおひるくもとおこれりもうる耶蜘ハいるくもり
五ものでしらこうれとおこーてひるハ主まうまう
ををくひたまへいろひんくと六耶蜘まてにいひひ信う
をくこあるくぞおそまやつひこおこそ風と海とをいま
しめておひるおぞやにあまうモ人ぐあやーこていひ
ひろハ風しうこまにをくこハいるる人ぞや六耶蜘
むこのこーゲルゲセンの地ゆいくるに鬼ゆとりつくれいる

さきりのまの墓もりいでゝ、れをしてくまなくさがしてゝ
人そのうちとをぐらうとあるいとひぢかゝ
神の子那蘇よりあるゝいたまてにおいてなんぞあづうんや
ときいゝてうらさるにつまてとせるやうてうにさるや手家の
おりゝひてうらうるうまてうるうるうる

こゝに鬼ことりつれしをあやしみ思ひぬらんことをおぼつかなくおもひいでゝ那蘇と見こいでゝこれをきてこのものこそ那蘇なりけれとおもひつゝ

第九章

那蘇舟をもてこゝにまうこゝにたにまうこゝにひとりぐ癩癘にて床まゝふしたるものと聞きつる那蘇ゝの信癩癘にて癩癘のものこいひげるハ子ゝゝるやそうし汝のつゝもゝるゝゝれりゝゝゝゝあるかくしやゝらゝるのうちにこのハハけるゝゝとおりゝ四那蘇そのおきゝとゝて

いひげハなんぢがいうあれバうるあーさとおもふ五それ
なんぢのつまゆるされうしいまこゝおらであるいまこと
こいづまうやそこゝやハそもくゝ人の子地ニおいてつまとゆるの
權あるをもつてせんとそつひに癩癇のものニいりおそて床と
をとりなんだの家ニゆけとりもをるくちおそてその家ニ
あり八人ぐくこてあやしこかくるのごとくさらくとして人ニまひ
一神をあがめり九耶蘇うたりをこてマタイとかつくる人
税関ニ坐そをとこて つまにもくいげへといひけまバこらて
そくぐくり十耶蘇家ニ食をもつくさこと税吏つとある人

おりくさとりて耶蘇しそのでしともに坐せり（土）パリサイの人こまをとりてそのでしいひけるはあんぢらの師はいかゝ

うざしるものつゝある人とともに食をするや（土）耶蘇きゝてうまいひけるはそこやまをもつるの只醫師のたゝけをたのまるゝ（土）只まあくれをとりてまつりとうつせをとはこれいかゝるこゝろのひさそまるべくそれはまハでしるものとまわくあにさゝしをつゝあるまのと悔あゝしあるせんたふあり（西）そのゝたふ子ハ只まをてゝしパリサイの人

禁食とゝゝよ師のぐ禁食ぜぐらハいくぞや

十五 耶蘇まつりにいへるハ新娶のとうちにその友かゝ

むことあるゝど新娶まつゝひさゝのらゝ日ゝゝん

そのゝゝたこそ禁食とべけまゝ共ゝゝゝゝとあるもゝ

しゝゝ布もそつくゝゝふものゝしいたとあまバそのつくゝゝ

のハゝゝもとゝくゆゝゝのやゞれなかあくゝあまゝ

十七 まゝゝゝゝ革袋よあゝゝゝ酒といゝゝゝのなゝ

ゝゝいまゝゝバゝくゝゝけ酒りいゞゝゝゝゝまゝ

むゝしゝんゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

酒といまてうるおぼしまてるものなり六 耶緑まこと
このことをいとさとよある鞠さとり拜してまこに
げんハつぶむとあいきくや死せんとをとりてまこ手を
ゆたまくぐ生べし九 耶緑ちてそのでーとまにもこ
たるぶうり手 うと十二年 血漑とつぶひる女うこ
をとりてそのうものそにさとりぬ三 いふとなりもぐ
もうこうるよぶたるさくばいえとおくだり三 耶緑
うるのうり女とうていひりハひとあやうこうやとん沒の
信沒といやせりをるうら女このとうとりいえうり三 耶緑

そのつるぎの家よりつるぎ箱をとりくりて人々の
とさて 四 まことにいひけるハ 堅 こそもむとあハ死
どそ ていわたり人々 耶麻と あぎ ゐ り 五 人々いぶられ
しのちいりてその手をとりて少女おとこ 六 このさえ
あまぬくその土地よりうまれ 七 八 耶麻ごとさらり
の目ともひとびとひとびてひけるハダビデのそえやうまてを
あくれ 七 八 そ家よりうに目をひさらけれバ耶麻
うまてにひけるハつぎなくうること信をるかを
よいひけるハ主あり 九 とうまてのの目よ手をつひて

いひけるハ汝らの信じるごとくまなれと三十とをくらその眼あけられ耶蘇まらにたべくいきめそいひけるハ人の
ちゝぬやうにつくしめよ三十一ぶしかしまつていでくあまねく
その土地より耶蘇の名をのろあるさとの人
ぐ鬼よりつれる啞唖とつれてきたにくる三十二鬼
知いぶかして啞唖をのいつり人ぐあやしといひけるそく
イスラエルのうちこいまだかつてハそのごとくパリサイ三十三
の人まハ鬼のかしらまつりて鬼とをいぶせるといつ
三十五 耶蘇あまをくむしるとめぐりその會堂そとく

天國の福音をひろめ民のうちをべてのやまひをべてのよづ
ひとりやせ六人ぐとをもあるとれをねうまてハ牧のおさ羊
のごとくあるやをまきちらすぐまりまゆをあるそのをさ
ぐらちいひひとまこをたる獄ハ見ずしてくるのの
ハをくあしゆをこうりいれの主よそのうりいれをを
のをつくをとこうをねがへべし

第十章

さて耶蘇その十二でとよびまつるひげれる鬼ども
をおのいづまをべてのやまひをべてのよづへといや

そのちゝとゝまりにそれ十二の使者の名左のごとし
めハペテロといふるシモンとその兄弟アンデレ ゼベダイの子ヤコブ
とその兄弟ヨハネ子ニピリポ バルトロマヒ トマス 稅吏マタイ アルパイ
の子ヤコブと 名ダイとあづくるレブバイ カナンのシモン イスカリヲテ
のユダこれハそのひとり五 那穌この十
二とつとゝまりに命じていひけるハ異邦のうちり
もくなかれまた サマリヤ人のゝうちにはいるなかれ六 ひたすらイスラエル
の家のまよひ羊にゆくべしとゝ七 ゆきて天國ちかづきたれり
といひのろあしハ病をのをそゝ癩病をきよめ死せる

とゝみグゝせ恩とおひいゞせゞうけれバゞゞゞこゝと
べゝ九汝らの帯ゝ金ゝまゝハ銀ゝまゝハ銭ゝとゝのゝるかゝる
ゝ十まゝ旅ゞくゝろゝゝたゝのゝゝさ衣履杖ゝまゝゝゝそれ
くゝくゝくゝのハその食物ゝくゝべゝゝゝのゝまゝバゝゝりゝをゝべゝて
ひゝゝゞゝゝゝにゝゝゝバそのゝのゝゝゝ

むとさらさく足のうりとくべ一五まきに汝らにつげん裁判の日ゴマとゴモラの地ハらのむしりおかやをとうべ
ゆゑよ蛇のごとくさとくとかれもつ一羊と狼のうちよいとがごとく汝らをつくを
んで人ところとびよそれ人汝らと裁判所ヨマテ又
その會堂ヨおいてひらつべけ五バかり六まうたたた
奉行および王のまへにいろべ一ゑれ五て異邦人ヨ證
據とうあり九人汝らをさいやにまく
みことをいそんとおひとびとれいまもバいふべき

うとそのとき汝らたたまくるえ一キ汝らづくりゐ
あるど汝らの父の靈汝らとして凡くひるるり三兄弟と死
よりまもり父ハ子とまもり子どもハ二親さを誹てこれらを
ころさん三まも汝らまづ名のあるコをべての人コ惡まもん
さりあづくおくりまでもつのものこそをくくるべけも三人み
むりよ汝らをせめバかみひしらにまげよまもにあんづら
よつぎん汝ら人の子さらうまへコイスラエルのむしくをめぐり
つくるで四でハ師よりまもくどまもとべハ主ドり
まもくど五でハその師のごくもとべハそのあるどの

ごくあしくゝ足べ一き一人あるゝとベルゼブルとなつけバ
おもてそなの家のものとや六ゆゑ忌まゝとおそれ
いまゝとあれバつまれたるものハ
あゝれぞたるることあれバなりもれ汝らにくゝさたづに
ゝとハあるゝさたのづは耳ようさ一ゝとハ屋のうへまい八
ひろあゝ六身とこゝろて魂とこゝろをこゝあゝぐるも
のをおそれなれ寧たまひて體と地獄におとろぼ
ものとおそれ二元羽の雀ハ一銭にそうゝ
ざんやその一羽も汝らの父のゆゝさぞんバ地におつる

こと あるまで 汝手 の かしらの髪 ゆ ゑ かぞへらるる 三 お
そ ろ ゑ れ 汝 ら ハ 却 ち の 雀 ゆ り ま さ れ り 三 ゆ ゑ に そ べ
て 人 の ま へ ま で ま ま れ と ら と い ん の ハ ま ま で ま ま ま

嫁とその姑とこもむせんこゝろあゞこゝろれり夫人の仇ハその
家のものあるべし三七 母といつくしむものハ子
ゝをそこざるものなり母ゝこゝろも孫女といつくしむものハ
母ゝをそこざるものあり三八 その十字架とゝるそこまゝ
たゞくざるものもれゝをくざるものなり三九 そのいのち
とりむるものハこれとゝなひ母がゝわにそのいのちとゝ
なゝものハこゝまゝとりむべし四〇 汝らとゝくるものハ
るゝりまゝくゝこゝまゝとゝくるものハ母ゝれとつくそこものとゝ
くゝるり四一 預言者の名ゝまゝりてよげんしやとゝくるものハ

ぐんしゃのむくひとうくでしに人の名よりてたゞしき人をうくるのハでしき人のむくひとうくべし門徒の名よりてこゝらいろ〳〵のものに水いやかるゝ水いやかるゝものまとるものハまことに救ひたつぐんそのこゝろをものこゝろひとうしなくぐるべけん

第十一章

耶蘇その十二の門徒よをしへおくりしときそのひとくに
おいて道ををしへいろあんとあるようとをしへぬそ弟ハ子獄
よおいてキリストのうぐをとらきそのでし二人をつかはして

ものとまくらに耶蘇まつりにこうこうていひひろめ聞こうこと、
のうらをゆきて引子よりそで目ひとへハ鬼え跛者ハあ
ゆく癩病ハさくこうえ死ーくるものハよみが
つまづくさきのこハ福音とうやりぶきにしうて つまづくものハさくひなりきかつてのち耶蘇引子に
つゐて人ぐいこいいぢひくハあまとうんそ野こいぢや風こ
うぐうさるあーあるっなきとうんそいぢややくくうさ
こうとくさる人あるうこうきうえるとこるのハ

玉ぐしの宮にまゐりぬるとて、いでゝや預言者あるべう
實もあんじつゞけんとぞ、やまりもぞれたるものなりそれ
うよりは、波のまゝに道とそるるまゝつひと波のまゝにお
くゝとゝうるれたるのハこまきれハあるいまゝに波らに
つゞん女のうまたるめうちにいまゝ洗禮とあるを引ハ子と
ゞおゝひあるめおこゝどもゝ天國のからいさゝ
ものハこれうりおゝひあるりめあるいまゝ洗禮とあるを引ハ子の
とゝゝうう今ゝいゝゝまで天國ハくゝゞゝゝれくゞむりの
ハこれとゝうべしそれゝゝの預言者と律法ハ引ハ子の時

まで、うどんやーにんばかりおもー汝らはうくらと、とうのまうどうどうどうどうどうどうどうの耳あるものハうくべー十六つれらの世とあるたふんや童部市に坐ーてその友とともに汝らに箇と、ぐらぐ汝らとびくどう汝ら ひとりそとと 引ハ子食ども飲どーてうくれバ人ハ鬼になるものとと 又十九人の子ハ食飲ーてうくれバ人ハうに食をたーみ酒と のむものーて 税吏おとびつくあるものと友なるくらうき まーどんとハその子どもとせられ手そのうき

耶蘇おろくの不思議なるぞとをーたまひくるしく惱
あ〜〜わざるよりていまいめひそひるハニ罪ぞくひなるるみ
コラジン不思議のつぎをタイロとシドンよりまれーなくば疾くより麻と着
歷と身よりひてくひあくふむべきものと三れども汝ら
よつびん審判のヨタイロとシドンハ汝らよりもあるやとそ
べーミ天よりあげられるカペナオムよ汝冥途よりとそるべいる
もしあれバ汝よりなりるかしどのつぎとソドマよりなやとそ
バ今日まで〜るつべきものを四それども汝らよりつびん審判

の日ニ ソドマの地ハ汝らより重キやまとるべし[二五] そのとき耶蘇こゝ入て ひけり天地の主なる父よこのことをかしこくさとりたるものに隠し幼稚ニあらくしたまふを謝し奉る父よ げにもたりそれかくのごとくみ父のおりひこうみひこと なるもバ万物ハ汝が父より父の外子ともたるものなくまた子と子ハ父とあらん望むもの 外父をもたるものをしれるまゝおりきを負ハるものハ汝ニまことに汝ハ汝らをやとまとべし[元] 軛を負て汝ニまことをそれさきハこゝろよおいて柔和

まことへつくづくるのひとりとなれば汝らのこころよりもまさと
うべし[三十]それこそ軛はやすくこそ荷はかろしとおもへり

第十二章

その[一]ころ耶蘇安息日[にち]に未田[ばた]とをりにそのでしら
飢[ゑ]げれば穂[ほ]とつみ食くらめり[二]パリサイの人これをみて
耶蘇よいはく[三]ひとうらにあるものでは安息日[にち]よりをべからず
ざるこをなすとまたにいひけるはダビデとそのしも飢[ゑ]たる
しをなせしとをもぶるや[四]をるこら神の殿[でん]にいりて祭[さい]
司の外おのれあるひはいるものこのくらをべしぶるそのへの

餓とらつて五まゝ安息日に祭司ハ殿のうらうて安息
日をもせどもつをなさゝることを律法によおそゝまさるや
ハつまゝあんらにつゞん殿よりおうひあるものこゝにありと
ゝれあるゝれをこゝて祭とこのまゝとこのうるとうハ
つゝあるゝあるものとつをせるゝべしハそゝ人の子ハ安息日の主
あるゝバ九こゝとうりてうるゝの會堂にいるゝ十こゝ
かゝゝ手あゝる人ありけるゝバうゝ耶蘇にうひゝハ安息
日にいやゝとゝハあるゝとゝうこゝれゝゝと訴んとゝうる
ゝあるゝ十二ゝゝにいひけるハ汝らのうちひゝつの羊ゝ

日のその羊数息日に坑におちいりバこまとりあげざる
主いたに人ハ羊よりそぐ〻めゆゑに安息日ハ
ゆゑとなるとハ〻主ひこそのひとしひければ
のぞりとるゑくらい外の手のごとくいえり西バリサイの人ぞ
ゐたしたる耶穌ところそぐらやちひくれり十五耶穌これと
たりてこゝとさるにおりくの人ぐこまこゝとりうまつら
とゑるいやせり主ゐれと人ゐちくとべしゐとぞいふ
めりをこゝにちびんしゐ耳ザやのひゝとバこゐるぐりなく
くたゑくさゑこゝしゐ心ゐかるひ

ものゝ霊とあゝ異邦人にさゝとゝあるゝ
ゝゝ十九うまハゝゝゝ人ちゝゝゝゝゝゝその
ゝゝどゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一鄰を拂ひ出ずる森と云ふ二異邦人もその名ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ三
つまゝゝれて耶蘇ゝゝゝゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ
見ゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おもくとも　ちりて　まつに　いひけつ　そへて　あひうつ　國ハ
あるまつ　ありもべて　あひあつ　邑や　家ハ　うつべ　ど　六
と　サタナ　サタナ　とおへいさ　おのまと　あひあつ　そ　ゐり
もつくバ　その國に　いで　うべ　まや　もー　れベルゼブルより　て
鬼とおひいで　ふさバ　汝らの　息子　れ　より　おひいで　やゆ　ゑ
まつハ　汝らの　裁判人　ゑ　ー　六　もー　つま　神靈　より　て　鬼
とおひいで　さバ　神の國　汝らに　くやの　ぞより　元　あひ　先　つま
のと　縛ら　ざれバ　つま　さの　家　ゑ　ひりいで　その　道具　と
うぐ　ま　とえんや　その　後　ゑ　その　家　とうぐ　ゑ　べけ

第十三章　三七

三十

ことともにあゝざるものハ
むこさきとも
に
あつあゝざるものハちゝとゆ
ゆゑよ汝らよつげんをぐて人ぐ
のおうせるつゝ神とけがとこゝハゆゝさえれどのとくの
せいまい
聖靈とけがとこゝハゆゝさゝべゝ三人の子よそむらて
いゝのハゆゝさゝべゝ聖靈よそむさていゝのくらの世よお
いそもまゝ後の世よおいてもゆゝさゝべゝ三あゝひハ樹
もゝくその實もゝくせよあゝひハ樹もあゝくその實も
あゝくせよいゝにあれバ樹ハその實よりてもゝ
ゝり三四あゝ蝮のこゝね汝ら惡こまゝていゝそゝ善こゝとゝ

べけんやそれこころよりいでしものなり
また人はこころよりさまざまのあしきことをいだしまた人ハ
こころよりつくりあるしきことをいふことを天ゝれ
人のひとしきものひとしきことぐ審判の日にそれについて
うちあるべしそれまんちのこゝにまりてつなとなり
せられまゝ汝のうきたにまりてつをもりしせしるべけまた
なり天とゝたある學者とパリサイの人こゝへていひけく
師よさきゝ汝をりの天とんとゝをもこゝへてまた
らにいひけく姦惡なる世ハそれとりひきもも預言

者ヨナのたまはくなんぢ罪
そもそもヨナハ三日三夜鯨の腹
子も三日三夜地のひくくしてある人の
審判をうけてこの世とかくれたふべしいまもなほ
ハヨナのいひつたへにより悔ひあらためるにより
ヨナよりもまされるものこゝにあり聖南の女王この世とをるり
さぐさにたちてこの世とつたふべしいまもなほ
地のくそよりソロモンの智恵ときくたりにまされりもろもろ
こゝソロモンよりまされるものこゝにあり聖惡鬼人ちいでる

ゝき水なきところうてやきとむしもえぞ
四四よりてくるいでゝ家ゝかつんとひをくらかうふまば
明くるゝ掃除してきかざりるゝと見四五つゝゆおそ
のまゝうりあゝらゝ七の惡鬼とまなひ入てそたにとるその
人の終りのとりさまハ前ゝりうるゝのあゝきゝ
世もまゝかゝのごゝくなんゝ四六 耶蘇人ゝゝよゝれをうちゝ
ゝまゝそゝの母ゝと兄弟そゝたゝそゝれゝよゝのいゝんとかつを
四七ある人耶蘇ゝいひけるハゝゝあるゝの母ゝと兄弟あるゝに
いゝんゝとかつゝてそゝたゝそゝり四八つゝゝゝゝゝこゝろゝゝいゝゝ

母はれぞまことの兄弟はれぞや兄手とのぐくそのたらよさしていひはらこころ母し兄弟なりしかれば天こまことと父の御とおこなしものはそもこそ兄弟なれ妹なる母なれ

第十三章

その日耶蘇家といで海ごと座せりおびただしの人ぐ集りあつまりきたりけるとバ耶蘇船にのりて坐しそべるに人ぐふたたび三耶蘇にこと人ぐこさまのことをきくの時こいでころ四時

あるとき八ちのうぐりこ如ちれば鳥ときこつくせり

五 あるとき八つちくみさ磽地こ如ちにけえ

いで六日いでーやれ根あのまバうまくりきまいあるふねハ棘の

あのにおちていくこうとぶちこうまとうとびけりハまくあるた

おくよとき地こおちてあるひハ百倍ぐあるひハ六十倍ぐある

ひハ三十どぐみのまりぬくく耳あるまのハとくべく十門徒

ふちくりてまこいひひくハあるゆふこくこくくとも

まくるくるや十こくていひひけくハ汝らこハ天國の奥義

とくくせたまくまどるまこハちくせたまくざれバ

とりさしてものハあらんにあらねども
ぬものハまきもつものまぞもとらるべし十三らハ見てえ
ぞこうてさえぞさるゆゑよりれまくざる
まったいつり西ヨザトのよげんと汝ハ耳よりけしらし
ど目ようれどもえぞ十五そまこの民のこころハてくな
まて耶ハらもく目ハとちりこれその目まて見耳きそ
こころあるたまてといやくんこと
ぞそこくいつまかるつ十六汝らの目ハこ耳ハきくゆゑ
ふくいつもとりさいハまくまくに汝らよつげんおく

の預言者としたがしき人は汝らが見ところとうんとをもとども見ることをえど汝らがさくとろとうんたとをもそれどもさくをえぎりきたゆゑに汝らたるものまきらめたとへとをけ九天國のとをへとさてさとをざるものはあしきものとうどくこれもこれとをへとさをやうにこうまとどろびてうるものはのりをりにまきたるものなりキいし場にまれうるものはなりミとをくをとおのをまを根をくをしてもぐくだうるものをれバどをつのうもをこうとの難義あるひはせあるうとの

おうゝさとみちよつまづくものなり三まき
棘のあるにまれるものハこまとゝさけどもこの世
のうゝろづひまたうゝあぎむうゝとゝ
ゝさゝてゝるゝゝざるものなり三ゝき地よまれるものハ
ゝれをゝゝとゝさゝてさゝり百倍あるひハ六十倍あるハ
三十倍もゝるものあり四まきゝゝとゝあゝて
いひけるハ天國ハくゝひよゝたゝるゝとまく人ゝ似たり五
人ぐいゝひうちその敵ゝゝゝり麦のあるゝゝを麦と
ゝゝゝ天苗生ゝてゝるゝゝゝゝを麦も

きゝあらそはれけりもあるべきことにてい
くさけこゝろ
ぞやもたもべこゝろ人ぐ人ぐとなりとたもべあるべ
こゝろ
こゝろ人ぐ人ぐ

てそのくるしみ三
さとものといづくそぐつとさハかのらさとり おるひやなる
りのくまして そこの島をらりてそのえぐよやどるやどの樹
となれ里三まらくをうまてにかりけくハ天國ハ婦
三斗の粉よりいまてまくくみくくたるの麹のごとく
三四 耶蘇 ていとくとて人ぐくよをべてこのこくをこくりたまへ
里ふくくよちうぐれバうまりたまくどこれよ
げんしやよりてくくまくることバよりまくて三五くをまうく
けて吗をいくくくせのくぐめりかれくくとひいぐん

とゝ（ゝ）のゝ（ゝ）ゑんゝあなり三六つゝよ耶蘇人ゝくとかゝ（ゝ）して
家ゝいまりそのゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝりていひけるハくゝひけのかゝを
麦のゝ（ゝ）ゝくとゝまゝ（ゝ）ゝたまゝ（ゝ）ゝゝ（ゝ）ゝてゝまゝ（ゝ）ゝにいひ
けるハゝ（ゝ）ゝたゝ（ゝ）とゝまゝ（ゝ）くゝものハ人の子なり六くゝひハゝの世
界なりゝたゝ（ゝ）ハこゝま天國の子どもなりかゝとゝひぎゝく
惡魔の子どもゝらゝあり元そゝ（ゝ）れとゝまゝ（ゝ）く敵ハ惡魔なりかゝり
いとハ世のおゝくりなりものハ天のつゝひゝちゝなり四早ゝ
と麦ハあつめて火ゝやゝゝ（ゝ）ゝゝこゝの世のおゝくりゝおいても
くゝのごゝくゝなゝゝ（ゝ）ゝ四人の子をつゝひゝちゝとつゝゝ（ゝ）てその

國のうちらをべてつまづきをるものくそひくこうとなと人
ことあつめて四これと爐の火ゑげいるべーそこうそかみー
みまくい歯がきをること あるべー四そのくさたづーさ人ハその
父の國ゑおいて火のごくかがやくべーどくー耳あるものハさく
べーまくい天國ハくくひゑうくれいこるたうのごくー人うれと見
いでゑバくくーてよろこびまりてゆきそのりそるものとこな
うりてそのくくひと買ゑまくい天國ハくくく真珠ゑとりめんと
とるあくくうくどのごくーひとつのあくくくく真珠と見いで
せバゆくそそのりそるものとこゑうりそこゑと買ゑまくい天

國ハ海よりうらてさきくの魚とりる網のごとくそたちさハらしにひらきあげとりてさきのとうつくたれあーさきのとをそり四九世のおくりコおいちくのごくく天のつひらいそくたてしさきのうらうらあーさのとりコけ五十爐の火コれとをげいるべーそこそかるしことと歯かゞとをそこあしん五一耶蘇うまとこコひひりハ
ミみこのことをさこりーやうまにひひゃハ主たうり五二耶蘇
うまとこいひひるハちまとバをべて天國コつひてをそーれ
こうくーやあこうーしさきのとをこうさきのとその彫こうり

いづこと家のあるじのごとく五三さて耶蘇このごとくといひおくりてこうとさられり五四その會堂においてその人ぐのあやしむばかりにをくたまひけるに人ぐいひけるく

この人ハこの智恵とかくさなるわざハいづくよりぞや五五この

西の子にあらずやその母ハマリアその兄弟ハヤコブヨセシモンユーダといづくどや五六その姉妹こゝにあらずやかくこの人ハそこでこゝにあるものとなるどや

こゝに五七ひてつまづけり耶蘇ゝまこよりいひけるハ予言者ハその家のうち尊ばれざることなし

共うまて信ぜざるようにおくのてざなるまぶとうに
なったまくぐらー

第十四章

このとき國のコトレとおさむるヘロデ耶蘇の評判とて
その家來ヨハネ洗禮のヨハネ子なりうまみ
ぐりゆ色彼おそふーざるるとぐとおうるつ三もく
ヘロデそのの兄弟ヒリッポの妻ヘロデヤのこにしりて見子
とどくへらぐりてひとやよいまくれバあり四もバ見子ヘロデ
ようのとんをとりるハよりぞといひしゆえなり

五ヨハン子ところくんとろうそれども民とおそしかりこと
民ハヨハン子とよげんしやとそれバなりハヘロデの誕生日と
いとくいくくヘロデのむしろめぞの坐上ヨ舞てヘロデと
よろこぶせりゆゑよあるとくもりもひるくろのものと
あらうんとちひて約せうハまハその母ヨそゝのかられてあり
げまバ洗禮のヨハン子の首と盤ヨのせそうしたたまきれと
いつゝ王うまひけまどもちひくさうに席上ヨとる
あゆゆゑよあること命ぜりそるくも人をとく
しいやてヨハン子の首とさしもせりその首とゞんり

のぞてむとするあへけれこばむとあハこれとその母さ
げうりき十三男子のでーうちさきりて門をとち
ゆくそ耶蘇こつげうり十三耶蘇これとさ〜人をひてさ
びしくところへ舟よそそこさとさ人ぐくきてむらく
をいそ歩行よそこまたにおろぐづて十四耶蘇いでおくの人を
見あくまんてそのやあるものといやせり十五日くれて そのの
でーさうりていひけるこうすれさびしくろすてきたるや
おそ〜人ぐむらくこゆふそ食をつとともむらあるこいぐ
たまへ十六耶蘇うまうこいひけるハあくにおよぐどなんぐ

食物とてもきてにあくまで耶蘇ようひけるハるまてこに
ハて五のぐんとゝふゝの魚のミあり大耶蘇そまをとこへ
ゆたちこゝしとゝて十九草のうゝこをくしとゝ人ぐゝ命
て五のぐんとゝふゝの魚ととり天とあゝぶそ謝ぐん
とゝて門徒ゝあゝこで十八人ぐゝこあゝこゝり千ゝまゝ
そ飽ゝり十二のかごゝ一ぐそのあまりゝる屑とひろ
ゝり三とゝんあと子どものゝゝくゝひしものハおゝそ五千
人なりし三やゝて耶蘇人ぐゝとうゝをゝちゝまでとゝひ
て舟ゝのせむゝゝのゝゝゝたゝこゝゝゝゝたり三

とりて人くをとうへしたまひけるバいのちをひろひて
山よりのぐ[ノ上]ちり日ゐれでひろりそそこいませり三四舟ハ海中
まて逆風のゝあくる浪よりでゝそそくれ五夜七時ごろ
耶蘇うみのうへとあやうきてでしにいたり六そのうみの
うへとあむと見おどろきてそれ變化のものありとひ
ゝひけるハらゝやどくれ日ゐそなくペテロそ
そいひけるハ主よもしあなたなりバ命じてあな
たゝ水のうへをゆくめしまへ元それいひけれバペテロふな

ようぐうり耶麻ようくうんして波のうへとあるこしに風
のうへ　さとうて　おそれうづくりびて主
つらまとたどけうまへとうり三耶麻やどて手とのぐうも
とうくていひけ人信どるのうとときうのよ三ひんぞ
うんぞやうまて舟よのりけまバ風とうままり三舟こ
とりものうりうれとくしてきうにあるくハ神の子
なりといとり三四とるくうりて「ケ子サリ」の地ようれり
三五そのくうの人ぐ耶麻とりてそのくうの四方ようこ
人とうくそべて病ものとうづくうあり三六こで耶麻

の衣のもそこさくるこゝをねずゝりどもるさくるこのハ
みるいやされゝり

第十五章

ゝゝたに耶蘇のかゝしやとパリサイの人と耶蘇こゝちさい
けるハあるこの門徒ハいゝゝつの人のつゝとゝとハなんぞや
そゝ食もるゝゝさたそのゝとあゝハざるこハゝりこてきま
らにいひけるハ汝ゝハまゝ汝ゝのつゝまゝりて神のいまあを
おそれハなんぞや四そこ神いまゝめて父母とうやまゝこまゝ父
母とのゝとるものハゝらつをぞゝとのまゝり五ゝれどもるんぞゝ

いへけるハそべて人父母ゝ妻ひてあるゝことやなきものハそのへをものみりしいのてゞそこゝ父母とうやまゝゝゝゝ

ゝとかくて汝らハつゝゝゝ神のおさそとりなゝしくやり偽善しやゝゝ卍ザヤハらくゝ汝らにつゝて預言をしてそいへけ

この民ハ口そゝもゝゝらづさ唇ゝゝそゝゝゝゝとうやまゝゝ

そのこゝろくゝもゝゝゝゝざんか人のいまゝめをとゝゝゝゝ

ていさづゝゝゝゝと拝をゝゝ耶蘇人ぐゝとゝゝゝゝゝゝに

いひけるハそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よういづゝゝめのハれらそ人とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

耶蘇よりひけるパリサイの人らのこゝろをきゝてつゝしみて
とゝりたまへるの主こゝろをしりていひけるハコゝに天の父がうゑざる
ものハこゝにあつるべしゝまゝとそなひめらるゝの手びき
をもてめくらなり西もしめくらがめくらを手びきせゞこゝ
ろもよみぞにおつべし十五ペテロ耶蘇よこゝていひける
くるみたしゝとゝまゝにしゝたまへ十六耶蘇いひけるハ
汝らもいまゞさゝざるゝをべてくらゝいゝまゝあハ腹をゝ
ゝりて厠よりゝゝとゝまゝくらゝより
いづるものハこゝろゝりいづるまゝ人とけがしとするものなり十九いて

となれば、こゝろゝより出る惡念凶殺姦淫好色攘竊妄語
これハ人を穢す手とあらハれて食ふハ
人とけがらるゝ。三 耶蘇こゝとさりてクイロと云ふの土地ゆけ
ば三 こゝその土地のカナヤのとんをいでゝこゝにきたて
いひけるハ主ダビデのそゝなれとあなたをたすけむと
めゝをびしく鬼につかれり三 耶蘇一言もこたへにこゝろ
しハバその弟子きたりこゝをいひけるハこのあなたより
ドゝをこゝろ見てこれとさしたまへ三 こゝていひけ
イスラエルの家のまよひし羊のほかこれハつかはさる

とんあらうてゐれと拜してゐひけるハ主さまとたゞけ
たまへ　三六こゝていひけるハ子どもの大なるなぐる
ハらゝ　どもとんあ主さまりといふさしどいねもその主
の賜ものちゝ　ちゝ　とゝ　三七耶蘇ていひ
けるハとんあ汝の信仰ハおゝひなりゆへ汝
なるべゝをもくちそのむをあこのゝさらいえり　三八耶
蘇こゝとさりてガリラヤの海べゝこそて山よのぼりて坐せり
　三九おゝく　の人ゝ　あゝなゝめゝひ　ゝさきゝさゝ　の
やまひあるものとらもなひさり　耶蘇のあゝりにおき

かぐやをくちこれといやたまうこにおいて噛ハのひ
てをいをえあしなへハあゆを目しいハうあると人ぐくそて
あやしみイスラエルの神とあがめうり三那魚そのでしとびて
いひけるハ人ぐくそぞに三日ゆきまとにおてくらしあのあさ
ゆをまつまとあくれミ望そくくハ途中まそひやまん
とそうまきつと飢してさうをこうをこのまをそのでれな
いひけるハ野にそいづこうりくおりくの人こあうんれどの
ぞんとえんや耶蘇うまてくこいひけるハぞんいくつあるや
てうこひけるハ七とらうさ魚をそしあり三地こをとうれと人く

命じてぐんと魚をとり謝して こまをとりごとにあ
づけ八人ぐらゐあつまりおくらふて飽きるまのくづを
七のかごゐるほどひろひ食しものハをんなと子どもの
ゐに四千人なり耶蘇人ぐとさしめて舟よのげりマダラ
のさゐひまり

第十六章

パリサイとサドカイの人きたり耶蘇をこころみて天の印を
ゐまにたまとこふまをしていひけるハ日くも
ゆふやけすれば天氣なんと以

三朝ハあるさをのかきくりにゝりてけ八歳あんとい偽善者ゝそゝのひゝさとゝろゝとゝろつこゝとあるゝぞゝゝ姦悪ある世ハゝゝゝ預言者ゝもゝゝゝ

さくぎりとたゞひゝ論どるやぐまぎさくぎりう五千人り
五のぐんとあくていくくごひろひまゝ四千人ゝ七のぐんとあく
へていくくうどひろひゝこくとゝるれくうパリサイとサドカイの
人のうゝドとつゝーあとひゝーハぐんゝつゝそゝひゝにあく
ぎるとゝうにさくくぎるやゝこくにおいてどくうどをつゝーむ
ゝあくゝどパリサイとサドカイのゝ人のとゝをつゝあくとかくりゝと
さくゝるゝ耶蘇ピリッポのカイサリヤのくうにくうてくそのぎゝま
くくていゝひゝくゝ人ぐゝハ人の子とくれといくやゝ西くくくいひ
けくくあゝ人ハ洗禮とあゝをヨハ子ゝあゝ人ハヨリリヤ又エレミヤ

あるひハ預言者のひとりあるいハ
汝らもまことをしれといふやシモンペテロこたへていひけ
るハ汝ハ活ける神の子キリストなり耶蘇こたへていまこ
ハ血肉汝
シモンヨナの子汝ハさいわひなりこれをなしたるものハ
よろこばしめたにあらずして天にましますわれ父なり
汝よつぎていハん汝ハペテロなりわれこの磐の上にわ
れ集會をこの石のうへにわれ
べし黄泉の門ハこれにたちうべからずわれ天國の鑰を
汝にあたへ汝が地にとざしむることハ天にもとざしめられ汝
が地にゆるしことハ天にもゆるしめられべしにおいてでしたちハ

キリストなる耶蘇し人こつぐうをいまつめたまつりこのしさたり
耶蘇くしめてそのでしこまうぐうさそ長老
祭司のときがくしやうりおろくのくすりをうけ且ころされ
三日めくよみがつることをとりたまつりペテロ耶蘇をまへ
ていいあいひいでひとハ主よあくまこころせたまへ
これあるまことうくべくしど耶蘇うりうりてペテロいひ
ひとハサタナよりうしろへのひ汝ハまこつまづくるあ
なりそまこ汝ハ神のこをおもくどこのつて人のこをおもて
このとき耶蘇そのでしよいひけるハをしれこもくがれ

と知りてものハおのをとをそ〳〵その十字架と鰐ひつさまに
ちゝ〳〵べし[二五]いとなれバそのいのちとをくんと算
りみハこをとうしなゝべけをバありきさゝぶらあこそのい
のちとうしなゝべしいとなれバ[二六]人
あまねく世界とをきゝくらもそのいのちとうしなゝぐお
んの益をゝんやをきゝ人をとをそそのいのちこかんや
そも人の子その父の威光をとりてそのつひちとともに
さゝんとをそのゝさそのおこをひこゝろをもくにむこ
べしをこをたつぐんこゝろをゝらゝ人の子をその國

とうとうまで死をとらりのあるべ

第十七章

六日の後耶穌ペテロヤコブまたその兄弟ヨハネを
人をひてこの山上のぐんたいにつれてのまへ
をかくりぬん面日のごとくかがやきぬんころもひかりの
ごとくしろくあるをりモーセとエリヤ耶穌とともにたつり
てゐるをみるペテロこたへて耶穌にいひけるハ主よ
つまりこゝにあるハよきことなるゆゑにわれらこゝ
に主のためにひとつハモーセのためにひとつハエリヤのためにひとつの三のいほりを

こたつくゝせたまへと五のくいなどにこゝかゝやきする雲れ
らをおかひぬこゝ雲ゝりこゝ忘ありていひひろこれハこゝ心
よかゝゝよりぐ愛子ゝり汝らこれこゝくゝべしと六ぢ一こゝを聞
うつひとたたそれおかひよ耶蘇こゝりてくゝまら
ふゝゝておゝゝゝなゝいひひをハその目とあぐる
よゝで耶蘇のかひひゝる見ぢ山とぐるかゝに耶蘇れ
らゝ命ぢ人の子ゝぐくるまで汝らのみゝこゝを人ゝつぐ
べゝゝぢといゝりそのでしゝゝていひひるハゝゝばなんぞ學
者ハヨリヤゝたゝゝるべしといゝや耶蘇こゝくてゝひひるハ

獻ヨリヤハさたにそうして獻事とあるべし十三ども
おぐらされ汝らにつげんヨリヤハりくやそうしうの人れ
どもらどしてこで参まをこまこひせりまを人
の子まゆゆ人ゆりくるしめらまんとと十三こてに
おいそて洗禮とあとヨハシ子とさしていくれ
まり十四うまてハおりくの人ぐくようにあるに人耶蘇
ようこうり勝ひまづいて十五いひけりハ主よさゲ子とあれ
みたまへワうまとなまバてんうんそとりく火ひまも水ちも
たとれてくるおつぐくりめり十六こまとあるのぐに

つまゆげどもいやとこそあるを耶麻ゝてあ信
なゝゝひゝゝぐゝゝる世ぞいつまぞこれあんじゝゝたにとん
やいつまぞ是汝らをたのゝんやゝ太ゝゝまそまと一ま
ゝゝれゝいつり耶麻鬼といましめたまつりをゝら慰
うまゝゝりいゝゝその子ゝのゝゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝ九そのゝゝゝ
ゝゝひゝゝ耶麻ゝゝゝりゝゝゝゝゝゝゝゝ

そもそもかーこうつまといふものは汝らにあさ
ぐろこと七日なるべー三ちゑなどらのごひいのりと
断食あらばれバいづくとなり三ガリラヤとめぐるときに
那鮒で一二人の子人の手ニさまざまとまんと三こころ
三日めくるみぐるべーといひまバてーくるみぐかみ
めり西カペナオムニさまざまとうひとりのものどもを
ペテロ以ようこりてひひけタハ汝らの師も奉納金とおさあぎ
ろの三五ちもどといひてペテロ家よりりーくる耶鮒まづ
まこひひけタハシモン汝ハいかゝおもふや世界の王たちハ

運上や人税とれりとやおのもの子どもあるもの
りのめりりうニハペテロまこといひけるかゐ人ありと
耶蘇りまにいひけるハさしバ子どもハ自由なりモたゝ
ぐらゝとつまづかせざるゝためんち海へゆきて釣を
れさゝたつる魚をとりてそのくちをひらバ金のゝ
らべーこまをとりてコヽまとおもふにはあるゝ

第十八章

そのゝゝさでー耶蘇ゝさゝりていひけるハ天國へおゐひ
あるものハゝれぞやニ耶蘇おさゝるゝ子とよびまてのうちに

ミてそひひけるハまことに汝らよつぐんもーあ〜たすうてさ
をごのごとく〜やうやうとんバ天國（てんこく）よりきたりをえどゝ由ゑよりきたべ
てるあ如（ごと）きゐごのごとく〜おのれとへりくだるものハこれこそ天國
よおいておのれひくるものなれ五まことに名のあるかくのごし
きひとりのゐきゐごとくるくるものハ是とうくるなり
みづからとと信（しん）どるひとりのこのらふさるものとつまづくるを
ものハひさ臼（うす）とくびよりひて海のふかきこと
こゝこのものに益（えき）ありつまづくこゝハこの世（よ）のゐき
くひなくるつまづくをるハ余義（よぎ）なけきバなり

ちかづくつまづくもの人よりぞくひハうるべーハ汝の
手まきハ足ハ縛れをつまづくるもの空
げそそよ両手両足ありてづくる火よりなげいまらまき
人よりあーなへまうハくるもの生よいらーれもー
汝の眼ハ縛れをつまづくるもの空ばれとわさぶて
なげそそよ両目ありて地ごくの火よりなげいまれん
ちりくあまていのちよりいるハらー十汝らのちいさひ
ちりのものとあそびざるもうつしめそれ汝らり
つげん天よりまーまもとろ父のかか

とつゝ入れバなり立そゝ入の子分ひとりものとくゝん
ゝ入れぐなり立汝らいくゝ男やゝ人八百ひさの
羊とりそその一足ちゝぐ九十九と山よのゝ一ゆゝて
ぎゝ、ひゝとゝるゝ立をゝこれよりゝぐきゝて
に汝ゝつぐんちゝくぐる九十九のりゝり糸をみひゝらの
ものとゝろゝぐんくいゝゝゝのちゝゝらものゝひゝとり
ゝろゝぐゝハ天ゝちゝまを汝らの父のゝゝろゝよりゝゝど立さ
ゝバゝし一兄弟汝ゝつゝと母ゝゝぐゝゝて汝とゝゝゝのみ
ゝていゝゝゝゝゝ一汝のゝゝバと ゝゝハ兄弟と挽田べ一

六ヶしきうどんバ二三の證據人のらぐこうそをべて
いつもとさぐめんこめんにかくしのとりやうをつきめぐて
きしきしきらとりきうどんバ公會こつびくさまく公會こ
てるうぞんバまと異邦人いおうじんうぞしりのごくきのと
ぜくこハきくこに汝らこつびん均あそ汝らぐ地しひぞと
八天こひそばん おうそ汝らぐ地ままくこハ天こんきん
九きくこハ汝らこつびんもー汝らこうり地まそ爭こぞこもも
ひくくりとめバ天こまちまとうぐ父こりうまてこひこうこ
ゑべー手 それこぞ名こうこりて二人三人あつまりこうこ

そのうちにあるべかりし耶蘇コさべテロ耶蘇コさべたりていひけるハ主よりが兄弟コまよつゝとおうてゆるせべきやいくたびまでぞ七たびまでぞ三耶蘇うまていひけるハ汝よるゝたびまでといふにあらず七たびと七十倍までといふなり三このゆえに天國ハ家來の勘定とをあらんとするに王ゝる人よりてつられしうり西あらんむ也バ千萬金のひさなひしたるものと王よりひさきたりしよつくなりてそのたりなきにたりてその君その家來とまた妻子をあらゆるものをうりてつくのてと命じたり

天白石の家来ひまをとりていひけるハ君ゟ給はりたまものゝ家来ハ君へ
たまものゝ家来ハ君へ
ゟ給はりたるものゝ家来ハ君へ
ゟ給はりたるものゝ家来いぞくおなじくなるべしとさるうけがハぞしてゆさひさ
れそこのひとをあるせりその家来いぞくおなじくなるべしとさるうけがハぞしてゆさひさ
の迷ふ酩酊のひさおひしたる友コあるいはまバこゝまとて
〈咽〉とりひさおひとくさいひけまバその友ありりに
ゝてこれゝねぞていひけるゝ見れとあくれこたまゝゝで
ゝみつくなるべしとさるうけがハぞしてゆさひさ
おひとつくなるまでこれをひとやこいまゝゝり三されバかの
友その名なせーこゝとをとてゝさゝゆゝさそなせー

こゝをもてその君ヨとゝもせてり三こゝにおいて君こゝれとゝひ
ていひけるハあゝ家來やうゝ多汝ハ只色よりはゞ[illegible]ひ[illegible]ゝ
こゝ色汝のひさゝおひをこゝろもちゝり三只汝をあくれ
ひこゝくゝ汝もさゝ友とあくれかむべきことならぬやと西その
君いうてひさゝおひをこゝろくなよまでゝ色をひゝくゝる人ぶり
只こゝやり三五りおのくこゝろより兄弟のあやまちをもる
さゝ天のヨゞ父もさゝ汝らよくのごゝくなりたま
ハバー

第十九章

耶蘇らのことをいひおくりしとき、ガリラヤとさうて翌朝のむかしユダヤのさとひよりはじめおそくの人ぐくれるとふ〻ーバそこうてこれらといやーたまへり三パリサイの人さうて耶蘇をこころみひけるに人あるのゆゑをその妻をいざとハらさやこゝへてゝ来るまいひけるに元始より人をつくりーあこれを男女につくりたまひーこのゆゑに人父母をくまれてその妻とそひ二人のものは一體となるべしといひーこゝをいまゞゝまさるゝ六されバくやうつまあらて一體なり神のあくるものを人くるゝと

べしとぞ耶蘇よいひけるハとてこれバモーセハ離縁状をとりて妻といふとべし命じてうんそやハりまたにつかはしたくモーセハ汝らのこころのつよきにしたがうて妻とぶることゆるせりされどもとハかくのごとくあらざりしなり九月れ汝らよつぶんれそも淫事のゆえなくしてその妻をいふべからずの婦とめとるものハ姦淫をなすなりまたいぶされうる女をめとるものも姦淫をなすなり十そのとき耶蘇よいひけるハ人つまにおいてくるのごとくなればめとらざるまさにひけるハさだけられるものよりまたにひけるハさだけらるものあり

ぞれば人ゝをのゝことばをきいるゝことあるゝども十それ母の
くゝりうまれつるる寺人ありき人より寺人ぞ人ゝをまれ
つるものまゝ天國のゝゆにはのるれより寺人さまるゝるのゆり
くゝりをいるゝのハこれをきいるべし十三そのゝさゝ手とつけ
てゆのうんゝるゝ那縣より十四きゝるおきるゝ子ゆり門徒これ
とゝぶめくゝり十四那縣いひぢハおきるゝごとゆりてきゝられる
きゝるをきゝんぞるなれそれ天國のゝのハゆくのごゝをゝを
のたゝまバぞり十五きゝるくゝこれる手とつけてそのゝゝろと
さりぬ十六こゝるものゝこゝりてこゝいひるハゝるゝなゝ

師やうれかぐきりおくいのちとえんとなんのよろこをなんとくらやさきまをひけるまをとをとをいハんぞや
ひとりの神のかくるハらまのちををしいのちこいんを
うつせだいまりめとまりくしたハ耶麻こいひけるハなるぞや
耶麻いひけるハ姦淫をしらぞわをむべらをと
いつくりの證據とおべらをと父母をうやまハおのまの
ごとく隣のりのをいつくしむ一十ひとさまのうまこいひけるハ
このことハうれいなきうまれりまをなるなる
こうけるこしありやニ耶麻うまこいひけるハもーしるをとく

ざんとおつせばゆゝそ汝が所持のものとうりてまづしきものゝ
おもてこせとゝのたまふ天ゴ財をうづ一旦もちてさきたにたゝく
三 ゆゝしさのものいふことをうけたまはりそれうまはる
ひなる身上なるべしバなりかの三 耶蘇そのでしゴいひけるまゝ
こゝに彼らこつじん富めるく天國にいることかゝまく汝
らゴつげんとあるものゝ神の國にいるよりも駱駝針の孔を
くぐることはなはやとさなんかの五 でしゴこれをきくゝ
おどろきそいひけるハたゝしバをくるものハたれぞや 六
耶蘇ゴこたへていひけるハ人間にハあたゝぐることゝ

まて神よハあるべきものペテロうけて耶蘇よりひ
けるハうまれつきて貴君よりなることを
うべきるハ耶蘇うまれにいひけるハまことに汝らよつぐんれ
よりてハ汝ハ世のあるたまるとこたに人の子そのふとき
くるゐよりもきくイスラエルの十二の支流を支配して
十二のくるゐをべて元ヨリ名のあるる家あるハ兄弟
あるひハ姉妹あるひハ父あるひハ母或ハ妻或ハ子あるひハ田あるい
をすてしものハ百倍をうけ且かぎりあるいのちをつぐべし
手はなくの先のものハあとになりあるものハさきになるべし

第二十章

それ天國ハ朝くれやく葡萄園にくだりてくるものとやとひこそ
する主人と似たりくるくるものとハ一日に金ひとつとあるこ
とく約束してこれらを葡萄園にくだりつかせり三時ごろ
九字ごろいでてまちにひまをりてたりのをみて四時ごろ
に汝らも葡萄園にくだりつかへ相當のあたひをとらえん
といひけるバこれもまたゆけり五時ごろ十二字と三字ごろい
でてまたかのごとくなせり六五字ごろいでてなほひまをりて
たりのをありまたにいひけるハ終日ひまをりてこゝにたゝ

あんぞやさうまてひけハこまとやすのなさあり
しうまてにひけハ法もまい葡どうぐけこゆさて相當の
價をうべしハ日くれこぶぐうけのあるドその家のそたに
いひけハくくくものどもとうびてあるものとはじめして
さうるものまぞこれこあるこくとくべしと五字ごろうやと
くれしものどもこうりて金いとうづとうけうりくじめのもの
どもこうりてうまてハおやうるなんと身ひしまきく
金ひとつをうけうりこれとうけてあるドにつぶやさていひる
くこのあるものハ一時ぐうりくくこうこに終日の苦労と

暑よりひるがらとひくこれとあやりそのひとりよ
うこうてうひけ六友よりれ汝ち無理とあさとられと金ひ
らのやくそくとあさてやや汝のものとりでゆけまきく
汝のごくこあるものもろ上べ一主りぶものをもつて
知ごくにあとハくるぞやれよさよりて汝の眼ゆ
しくらかのごくあるものハさだありさるものハ
ゆるくよるべそれよりそるものハ知といでも撰ぶを
の八をくあ一主耶穌エロソルマよのぐるさ途中ゆて人をけ
て十二ととなひまらにいひけるハ六こよりれらエロソルマに

のがれ人の子祭司のもとにくしやゝとゝをれてゝまつこゝをを
死罪ゝさぶゝ丸なぐりむちうち十字架ゝつけんとゝ異國
人ゝゝもとゝまんまゝ三日めゝよみがるべし　そのときゝゝ
の子ゝゝたちの母その子ゝたちゝゝゝゝ耶穌ゝゝゝゝ拜してゝれ
ゝゝむるゝゝゝゝ三耶穌ゝゝゝゝいひけるハゝゝゝとゝゝやゝ
ゝゝゝゝいひけるハこのゝゝたちの子ゝとゝゝゝゝの國ゝおゝそ一人
ハゝゝゝの右一人ハ左ゝ坐をゝゝとゝゝゝ三耶穌ゝゝゝゝ
けゝハ汝らハゝゝゝゝゝゝゝゝを汝らハゝゝのまんしゝとゝる
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

うまゝ耶蘇いひけるハらくをべし三五 耶蘇うまゝたいひけるく
汝らだつゝらびさるづきとのゝたくさらびらくる洗禮とらくべ
たゝ一あるしらびが右左ゑ坐をるこゝハびまゝりあるゝをゝ
いらびらが父よりうゝをゝまれゝるものゝゑあるゝべゝ十二十人のゞ
れをゝまゝて汝らの兄弟をいゝどゝをまり三五 耶蘇うまゝをゝ
びていひけるく異邦の領主ハその民をつゝぐり大なるもの
どもハ權をもつてうまゝと支配と三六 たゝなゞゝ汝らの
うちハさたあゝゞ汝らのうちおゝひきんとおもをるものハ
汝らのつゝゝものとなるべゝきまゝ汝らのうち首らるゝきんと

なつをるものハ汝らのちゝとなるべし（六）人の子も人をつくるあに
あらざるやうにて人をつくれまゝその生命をもてゝおろかの人
よかりてあるゑんあにさきたちなごとし（元）まこと（エリコ）
をいでゝるとゝさおろかの人ぐ耶蘇をもちみち
のゆくりをそなうるゆくりの目もひ耶蘇のをぐるゝ
さびていひけるハ主やダビデの子をまゝとあくれたまへ
三人ぐだるべしとうまゝといきめくりされども弟子
のゝまこと（三）耶蘇ゝてをこれをよびていひけるハ汝らにあるを

あぎんとわづらひや三耶蘇こいひけるに主やうれらの目のひらん
うをねがふ三四耶蘇おのひやりてその目に手をつけにをる
くちそその目のひらきけるバ耶蘇こたへてゝ

第二十一章

さて三五ロルルマこちらづさ撒ん椒あべッパゲこいてゝさ耶蘇
ふたりのでしとつくりてゝまつたにいひけるハ汝らの數ゑるむに
曲りよつるびる驢馬とその子のまたあるこやどてあるん
それとゝらそてつとまこのひさこふれ三を汝こまつるいかも
のあゝバ主の入用ありといへべしまをれバてらこれとつか

こゝとべ一四ゝひんしやのこゝにうゝ汝の王柔和して驢馬
の子まのり汝ゝこゝゝとし三ヲンの姉ゝつゞゝとゝ五いゝしゝかるゝ
やうたくゝゝゝ六門徒ゆゝゝて耶蘇の命ぜゝごゝくなゝ
七驢馬ゝくその子とひゝこゝゝりまのれがこゝろもとそのうゝゝ
耶蘇とこゝれゝのゝゝむハ人ぐゝくゝゝくハその衣とみちにしゝ
あゝひハ樹のえゝゝとゝゝゝてゝゝゝゝゝゝ且ゝゝゝゝあと
ゝたゝゝ人くゝゝびていいひゝ八名デテの子ホザナゝゝ主の名にゝて
ゝゝゝゝのハ讃美べいゝゝてゝたゝゝゝゝゝゝホザナゝゝ耶蘇
エロソルマゝゝゝゝゝ城下ゝゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

れぞや土人ぐこれハガリラヤ ナザレのよびんしや耶蘇なりし
いつり土耶蘇神の殿よりいつり殿のうちよ賣買をなすものとおい出
し兌銀者の臺まき鴿とうるものこうけをたとし土三うまち
よりひけるハ家ハ祈禱のいへとなるべしとなるべきたた
まとなるを汝らこれを盜賊の巣となせり西賢者めーるへ
の人ぐ殿よ耶蘇よりこれバ十五祭司のとき
まちと士子ちそのいなせーふーざるこまき童子の殿
まそよぐりてダビデの子ホザナといふを見て怒りとく
ミて土耶蘇よりひけるハこうまつるのいまこまとさくや耶蘇うれ

らにいひけるハちりとるをこまく乳哺の路ちかむるとそをハしと
ちるをれしーとゝまぐゝちまぎるゝさもをぐくらこまてとくるれし
城下にとゝぞべタニヤコゆゝさそこにやどまり六翌朝城下にり
うるゝゝさ飢けもバ丸道のゆゝちりコひとつの無花果の樹
と見てらたにそゝるコ葉のこコまて樹コまえざりけ
まバいまゝりのちいつまそる果をむをぐことかるゝまぐと
樹コいひけもバ無花果ちどくゝろコまぬ平門徒見てあ
やーこいひけバいちどくのうまーことハうまをみやるり
三那魚ラいゝてうまにいひけバまゝに汝ら尺づんを

信ありてうしどもそんバこのちゝ
なゝしどこの山ようつり海ゝいてもなるべし三且
汝ら祈禱ゝさに信じてねがゝこゝぐゝ得べし三那躰
殿ゝいりてゝゆゝゝさ祭司のゝゝゝおよび民の
長老あどらうてひけるあるの權威ゝゝそのこゝ
ゝゝやゝれがこのけんいを汝ゝあゝゝゝ三耶蘇こゝ
ゝゝにいひけるハしも一言汝らゝゝゝんこゝの
こゝをつゝるゝバハしもあるのけんいゝゝりてこゝゝを
ゝいゝこゝを汝らゝいゝゝん三ヨハンの子の洗禮くいづゝゝゝゝや

元天人ゝかまてたゝひゝ論てゐひけるハもー天ん
ゝゝゝいそゝさゝバあんぞらまと信ぜぬやゝいそん三もー人
ゝゝゝいそゝゝまて民とおそるゝれゝ子とゝゝげんしや
と思へバなりモもゝち耶蘇ゝゝゝゝてゝゝゝゝゝゝ耶蘇
ゝまゝたいひけるハゝまゝあゝの權威とゝてゝこゝれとあゝと
と汝らゝゝゝゝゝゝ

いひけるこゝろをて主とれもくべくこゝろいひけるハ
三このさとりのゆきゞ父のひるゝとおせやうまつりいひけるハ
兄ゝり耶蘇うまつりいひけるハきこゝに汝らつげん稅吏
およびあそび女ハ汝らゝり先ゝ神の國ゝいるべし三これヨハネ
くゝでしゝさ道ゝり汝らゝゝゝゝこれと信ぜるゝゝさ
ゝりおよびあそび女ハこゝまゝと信ぜり汝らこれとゝてもれ
と信ぜるやうゝのちゝゝひあるゝゝゝゝゝゝ三ゝゝゝりのゝゝゝと
ゝひある家のあるゝ葡ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝとうえゝゝゝゝゝとめぐ
らしそのうゝちゝ酒搾ゝゝゝり塔所ゝゝゝて農夫ゝゝゝて

遠方へゆきしが三四果期ちかづきけるバその果とりんだめる
農夫のりくらべとつくせり三五農夫どもそのたゞきとり
へひとりをひちちちひとりと石にてうたり長きを
かゝめたるべとまくらもおりつくせにうまくまきの
ごくをせりつひまくるがこどもバらやまとあるべしといひて
その子とりまにつくせり三八農夫どもその子と見てあひ
まづひこひるハれハあとつぎさるりいぞこゝとところてその
畑地をもとくべしと元をみくちこゝとくく葡萄ひよ
ゆひづてころせり四ぢうとくひのあるぢきん

とくたにその農夫よりことばんやひけるハこの
くるみぶどうをつくりてぶどうをとるべくさきのものどもを
獲ざりけるとうるとくさその果をもとめるかりの農夫より
うけとべし四三 耶蘇うまつりにいひけるハ聖書より家つくりの
なをすてるこれ石ハ屋のをさの首石になるこれ主のおしたまふ
こをたにしてそれらの目はあやしむことなりとなるざれしを
いまぶどうやゆるまつりまを汝らよつぶん神の國く
汝らよりうばれその果をむすぶ民よりあたまをくる
べし四四 この石のうへにたをちてこのハくだれこの石その上へ

よりちかくそのものとおしつぶさん四五祭司のとりもちなびパリサイの人がうまのくちとしているとをうて四六耶穌をとらへんとおつとれども人ぐちを預げ言しやとをとりよりておそれあり

第二十二章

耶穌またくちとりて天國くあるを王なる人その子のあに婚禮をあるとごとくこえまいりまねきしものをむかへんとつかはしたるをこのまでどとつかはしたるに

けるハこゝよりまゐりて肥える畜を
ゆるしてこゝにくくるべしとて
まゐらせしのこゝ五されどかきてこゝにつりさげたりし
ハおのれの畑よりひとりハおのれの商賣よりかへりハそのかゝ
のもとへとゝくづくめてこゝろやりを主にとゝて
いとり軍勢とつくりてそのこゝろやりをかぎりそ
の邑と焼ぎうりハそのもとへいひけるまゐを
たにそるくるまどもまゐらしのハ客とそたにふぐろりの
ゐまバ九ちもたゆきあるゝどのものとうまひまゐけよ

十そのちからをもてさまざまのものこしらへ
ものものしくかざりあげたる容儀充備せり
十一王客とうんとそなへたりけるそのひとりの禮服と衣ざ
う人をうて十二友やいんぞ禮服をぬぎてこれにうつしい
ひけるとき黙然として十三さて王をみるに手足を
ちぢりてそこの幽暗よりのいでゝそこにそなへたる
十四歯をもてるべしといつり十五そこにたるものはおの
といつゝ三ちまきものはくさパリサイの人
いそいそしてうめきとひあやまりたんとあはくちりて

六 そのごとくロデのもがらとつくりていとくせけるハ師やれ
らあるいハまさしてあるものをすてきらに神のうちとと
きこれもよろずとりこれ人のうちと見ざること
ありきまとバ人税とカヒサルよおさむるハうちやあーうや
あんだいぐおりるやうまたつげたまへ 六 那鮮そのあー
さとりていこころるハ偽善者よあんぞうまとこうむるや
九 人税の金子とうまとよこうせたまいびまバ銀銭のうちを
那鮮よりちうにりヲうまとうにいひけるハこの像と號ハれ
ぞや三カヒサルのなうとうまよこうをるとうまてそにいひ

げんさいバカイサルのものハカイサルコくーまゝ神のものハ神に
うるべーニうまてうれとうてあやーゝ耶蘇とうたひてきまり
三その日ユダヤみづるうくハなしといひるゝくとサドカイの人
耶蘇よりうまりて西いひけんハ師ゝモーセのいつゝる人子ゐ
くーて死ぬればその兄弟その妻とめゝり子と生せ兄弟の
あとをうるべーと二五そこにうまてゝのゐゝに兄弟七人ありし
長ゐるものめゝりて死て子ゐけきバそのつまを弟におく
まり二六その二その三その七までゝるゝもりもつひコ
とんゐまて死せりゝみづるゝさハ七人のうちゝまの

つまとするべきをこれをうまれとめとりしのあるべバリサイ
元耶蘇ごとくてうまてたいひけるハあんぢら聖書をも
神のちからをもちてありてやまたり三十そもも
よまざるハ娶らざる嫁がざる神の天よりあるつかひたちの
ごとし三死せしものよみがへることハ汝らに神のつげたま
ひしこと三これハアブラハムの神イサクの神ヤコブの神
ありてをいまだ生ける神ハ死せしものの
神にあらずといひるるの神なり三人ぐ　ちてそのを
へにおどろきたり四パリサイの人耶蘇のサドカイの人と閉口

さてとさてひとつゝよあつまりしよ三そのうち
教法師のゝるものゝひゝり耶穌とこゝろうんあるよらふていひ
けるハ師やおさてのうらおゝひゝあるいまゝめくハゞつまとぞやモ
耶穌うまとよいひけるハ汝こゝろをつくし精神とつくし智恵を
つゝ汝の神なる主を愛をべし三六これハ第一まゝておゝひ
なるいまゝしめなり三九第二もこれゝよおゝどくをもゝちこゝ身
のごゝく汝の隣を愛をべし四〇をゝてのおさてさゝ預言く
このゝゝつのいまゝめよらまゝり四一パリサイの人あつまりたる
ゝさ耶穌うまとにゝゝていひけるハ四二汝らキリストよついて

いとおしやれの子なるやまつ耶蘇よいひけるたく
ダビデの子なり四三かとたいひけるハさいバダビデ聖靈に感ド
てこれを主とよるあるハいかんそダビデのいひけるに四四主
主によりひけるハ汝の敵を汝の足ごいとそろまでヨゲ
手の右に坐をべしとされバダビデこれを主とよるくさまとバ
いかんしてその子なるや四五ひとりごち一言も耶蘇よこ
たへるあたハずてまたその日よりのちやあへてこれに
とふものあらざりき

第二十三章

そのとき耶蘇人ぐとでーまつぴりさいの人ハモーセの位に坐をゆるまるべくて汝らこゝにとまりておこるべーれどうまるのおこなひのごとくあるとこゝなれいつゝふまるバうまるべくハ唱うるのごとくみしておこるゝふことなけまバあり四まるべくハおきくしてうつざげてさ荷をくりて人の肩にうつがをれどもおのれハひとつの指にそこまをとうごうるをこのまゞ五まるべくのおこあひくをべて人にこゝまんとあるひその佩帯をくゞひろくしーその衣の裾とおわりさくしハまこうるまゝの

上座會堂の高坐を市街のあいさつ人ラビとラビとをゝらんとおもふことなれば汝らの主はひとりとなるべきもキリストなり汝らハミな兄弟なり九地上あるものと父とどなることなれ汝らの父はひとりとなるべきもの天上にいましたまふなり汝らの主はひとりとなるべきもキリストなり十一汝らのうちおほきものハ汝らのしもべとなるべし十二つゝしまるるものハひくくとなるべきものハつゝしまるるものハひくくとなるべきものハつゝしまるるものハひくくとなるべし

ありべし十三 嗟呼汝らはなはだみがくしやとパリサイの人
偽善者よりいふとあるまはそもそも天國と人のまへとをとらて
おのれもいるこそしていんとしるものともゆるされば
なり十四 嗟呼汝らこそさいはあるみがくしやくパリサイの人偽善
者よりいふとあるまは娶婦の家を并呑しいつくりてあざさ
むりとあるとこれまりて汝らはおりさき刑罪をうく
べしまはあり十五 あゝ汝らこそさくひあるみがくしやくパリサイ
の人偽善者よりいふとあるまはつらぶ宗旨をひとりでもひさ
いまんとあるよ海陸をめぐりうるまはそこをひとり汝ら

らうあるか倍してこれを地獄の子とあるやうに汝らこそ
そひあるる贅者ある手ひとりそのうちにたぶれまそる
殿とさして誓のいちひとりと殿の金とさしてちよ
のハそむくべうどといつてさおろかにしてめしひなる
のとうとうさのハ金あるり金と清浄とそるの神殿
あるるいづまそやハきこれまそし祭の壇とさしてちよ
のハちひとせそそのうつのそるのとさしてちよのう
ハそむくべうどといつて九おろかにしてめしひあるるの
ようとうとうのハそるのうのと清浄とそる

祭の壇をもうけまぞやキゆるつまりの壇とさーてらふ
ものくまつりの壇およびそづてそのうくよあるのとさーて
ちくしなりミまさ神殿やとさーてちくしりのハみやおよびその
うちくよいまとものとさーてちくまるりミまさ天とさーてちくふ
ものハ神のみくもおよびそのうくよ坐とるものとさてちくふ
ありミあく汝らさざつひあるるがくーやしバリサイの人偽善
者よいくくなれバ薄荷茴香馬芹の十分の一とりて
おさめそのまつりもおろんどべきりの義しを信とく
汝らこれとをつこれもおこるくべきのありたるもの

べうざるのもり 四 めーひの手ひさよげうりと瀘て出ー
駱駝とのひりのあり 五 汝らさづき盤の外とこさくーうち
よハもくさげ〜ゝるりのし淫欲なるものまそそりて 六 めーしひなる
パリサイの人よ杯し盤のそとをきくあんしめさづそのう
ちとこさくとちべーモあく汝らひさくひるおがくしや
とパリサイの人偽善者よいくよとあまバちくめうくろ墳墓
よにくりそくハうつくく見えうちよハ骸骨とさまくのけがれ
ゝそそくり六かくのごとく汝らも外まく人よたくしく見え
うちよハ偽善し不法ゝそくり 七 あく汝らざくひなる

うゑがくしやとパリサイの人偽善者しよいふとゐまハるぐんしや
の塁とゝそ義人の石牌とかざりまつりまれを先
祖のゝたにありしゐくぶ預言者の血とゐぐゝそ荷擔
やぐりしものとゝ三されバ汝らぐんしやをころせしもの
とゝゐるなり三汝らの先祖の量度とゝもせよ三蛇蝮のゝぐひぞ汝ら
いぞ地獄の刑罰とまぬうまるんや四このゆゑに預言
しやゝ智者と士子と汝らゝつゝそゝもとゝひハこゝろ
十字架ゝつけあるひハ會堂ゝひちうちひくゝにおいそ

おひくてめん三五かく義あるアベルの血ちり殿とまつりの
壇のあひだにそこらせバラキアの子あるザカリヤの血まで
地ちにあるべし義あるりの血ハちるる汝らにむひてきこえ
ト三六申さこに汝らにつげんこのこと云るこの代よむひへき
あるべし三七あくロソルマちロソルマちへらげんしやどらちし汝さつ
くるものと石にそうつるのあるそ牝鶏雛とつぐるもの
たるにあつむるごとく見れ汝の子どもとあつめんとおもへ
こと云ふびぞやさまど汝ハこのまど三八こと汝らの荒家
ハ汝らにのこうあり元ちまた汝らこつげん主の名ほうこ

ふるのバかりにいるまでハいま
ゝりのちてびゝきとゞろべし

第二十四章

耶蘇神殿ゝりいでゝゆきけるそのでし神殿の宇をとゝ
らせんとてこれバニ耶蘇うまたいひけるハらのものを
見ざるゝまで汝らよつぐん石の石も地まどこゝハたて
のこるまで三 耶蘇橄欖山に坐ときに門徒人とさけて
いひけハいつそのこゝろゝんやまゝ主ときゝてゝものおくりの兆
しハいつゝるこゝろゝんやまゝよつぐたまへ四 耶蘇こゝゝ入て

うまれたいひけるハ人汝らとあざむくねやうにつくしめさるいる
とかきバおろかの人ゴが名ゴとなりてきたりゴれハキリストなりと
いひておろかの人とあざむくべし六きゝ汝ら軍(ぐん)といくさの風聞(ふうぶん)と
きくべし見れどもおそれざるやうにつくしめよられるなかやむこと
をえざるのかきバなりさりながら終(おり)いまだいくさどもいふ
とかきバ民く民とせめ國ハ國とせめ飢饉(きゝん)疫病(えきびやう)地震(じしん)所(ところ)くに
あるべけきバなりハこれゑゴざくひのくるしみなり九そのときに
人汝らをとかやこまらしこまらせくべしきゝ汝らゴが名のゆゑにあ
萬民(ばんみん)よ惡(にく)まるべしそのときおろかのものつまづくられたがひに

まことしやかくうむべし　偽預言者おりおりおりおりの
人とあらむじくべし　不法うさきりておりくの人の愛
情ひやくうるべし　おくりまでもつぶあハれなく
くるべし　西まき天國のこの福音と萬民に證據とあさん
あるよあまねく天下こひひろめらまんもつるのちおくり
いたらん　ゆゑにあらとを憎べきものをもつち預言しやダニエル
によりていくまきしるのうの聖處にたちと見て「よむ
のうくんべし　その〻さきユダヤにとるものハ山にあるべき
ものうへにとるものハその家のものとりに出りるなれ田畑

よとりのハそのころもとりにゝるゐれ十九ゴらぐくひるハ
その日くゝめるものゝ乳とのいまをるとんをなり手汝ら冬きゝ
安息日ゑゑゝ逃ゝとゝとゐるさやうにいのを三つゝとゐるまバその
くゝさのおゝひゐるゐやこハ世のくゞめより今ゴいゝるまゞかく
のごゝゝさハゐりきゝくゝのゝゐるまゞけまバゐり三をゝ
その日とゝゞかくせゝれどんバのゝゐりもをくゝるゝあひゐるゑ
しゝゝりゐゞゝゝゝまゝるものゝくゝゐるゝその日をゝゞかくせゝる
べゝ三もゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
汝らにいゝるゐるゐれ言ゝゝゝとゝゐるまバゝゝ

キリスト偽預言者こちおこりて仕遂らるべきまもなくあざむくやうにおほひなる兆とをなすべし

ものをとるべきんこと

これ汝らをあらかじめつげおこしぬ

三六 もしこゝよりキリスト野のありともいづるなかれこゝよ密屋にありともいづるなかれ信ずる

なれモいつまでなれば電の東よりいでゝ西までのごとく人の子のきたるもかくのごとくあるべしそれ

三七 屍のあるところに鷲あつまるべし

三八 その日のなやみの後ちたゞちに日はくらくなり月はひかりをとらずして星はそらより

即ち天のいさりびとるべし　其ときに人の子の兆天よ
あらくれたる地上にある熊襲人の子權威と勇
ある光明ありて天の雲にまりとこうべ三千剌叭
のおりひるるこころをしてそのつひとつくしその子まれ
りのと天のこのくてりのくてまで四方りあつびべ三それ
汝ら無果花ときりてくとまるべその枝をそてよやくかる
して葉めぐくめぐ鬼のちくをとる三かくのごくまくる汝ら
をべてこのこくと見ちたにらをハちくく門ぐちよいるとれ
西ちこくこくに汝らくつびんこのこくくくるまでハこの民く

失ざるべし 三五 天地はうせんされどうせざること 三六 さり
ゆゑにその日をのゝきとゞまる父の行う天のつひゞきまれを
もつゝどもハアのゝきのごとくに人の子のゝきもまきもちゝん
三七 そもゝ洪水のまゝハ方舟にいる日まで人ぐく飲食嫁
娶ありて 三八 洪水ゝきりてもゝくゝみるおろぢときでもち
ざるがごとくに人の子のゝきもまきかゝるべし 四十 そのときゝきゝ
田畑にあるにひとりハとられひとりの婦女子
旋磨にひとりハとられひとりハのこる 四一 汝らの主
いつきたるかゝるもまれば 四二 家の

あるべき盗賊のこころとこそはべりけれ
家とやどりぜんこそとうくこころえよ四四 汝らも
きゝ覺悟せよいつゝとあるまじはべるべき子ども
らん四五 とさたよりて糧をとりまたにあるべきあるよ主人の
その家内のうちおそるべき忠義をしてかゝるべ
はべるまじ四六 その主人をしてかくつゝむを見バそのもの
はさゝひあり四七 ゆまきまこに汝らよつぎんその身代ぞ
よつゝさどゝぜんそのあしさとゝくハはべるべきこゝろよ主人
のこゝろハおそれて兄その傍輩とひとりも酒

ろひゝるものどもと飲食をとゝ初めおバ手ものもゝびの主人ハ却
くぶるの日とゝぶるのゝさたにきゝてれをとりこゝろ偽善
者と金をとるゝとて刑せんそこゝうそかるゝこと齒がくさるこ
とあるべし

第二十五章

そのゝゝ天國くゝもゝ火をとりて新娶をむかへいづる
十人の娘よめぞらべゝそのうち五人かゝこゝろ五人ハ愚
かなり　愚かなるものハそのゝもゝ火とともゝ油をもゝづさへ
ぞ四かゝこゝろものハそのゝもゝ火とともに器よめぞらを

ふるさとより五新婦者ハおそけきバとなかりねるいるもの
六夜ありにたらくるむてこさりぬむひよそそ
こゝろあるけきバセこのむとめどもるなさそそもし
火をらくのへるよハおろうるものかこさりのようけ
ゐくまきらのもし火さえんとそれバ汝のあぶと
ゐまくるけるくよ九かこさりのこふていひけるハおそ
らくハまきく汝らるまで寧賣りのよこそ
おのれのあるる買へ十ゐまる買ゐるさこさ新婦ゐる
りけまバをてよそるへしものハまとをに婚禮よいり

ふ門ハ仕りかるのちよそのゆの娘さうて主や
主やうまうらのひさたきとらいだきうてきたに彼ら
よつげんうまとに彼らとちらざるうりといつりきれバ人の子ども
ろ日と時をもちらざる面ハつしめよ古人の子旅ようら
人のごとしとのがちべとよびてそのの全業をうまうにあづけ十五
谷その器量よりて一人まく金五千一人ハ二千ひとりハ
一千とあくてやそびざちぬ十六五千の金をうけしのハ
てこれとくうかきまに別ハ五千とうけりきニ千とうけ
ものをうさ別ハ三千とうけりハちうよ一千とうけしのハ

やがて地とりその主の金とかくせり九万どへてのちそのもべ
のあるじこれをもてなし計會とをーけるに五千の金をう
けしのちそのかりる五千金をもちてまたかりて主やれに五千の
金をあつけしらるるそのかりた五千の金をもちけるとしいひをと
ぐ三そのあるじまたにいひけるハ嗚呼善且忠ありてべ汝ハ
うそつくにおいて忠なるものとつくるとしらん
せん汝のあるじのもとにいまこれ三千の金をもけしのちさら
ばそ主やがて二千の金をあづけるにそのかりた二千の金
をもてまたにいひけるハあ善且忠

ある所べぞ汝ゐづくあるこゝにおいて忠ゐゑやり見れ汝ゐ
おわりさものとつくさどゝせん汝のあゝどのゝろこびゐいま
ゝ百ちゝ一千の金とらひしものゝそりていひけるハ主や汝ハ
そびゝゝ人まそゝりゝゝ穫ゝり散さゝ
ゝゝろゝりあつひる人あるとまをまとりあまをバ五見れおそれ
ゆゝそ主の一千の金と地よりくゝせりそよあるゝハあるゝの
ものとえゝり六そのあゝどこゝえてゝまをよいひけるあく
しゝて且おゝるもゝどぞやゐまをハちゝぞゝりゝゝろゝりかり
ちゝさゝでゐゝゝゝろゝりあゝひゝまをとゝゝゝ七ゝゝバゐゝ

金とバ冠銀者よりあづけおくべきおりきたればうるし〳〵ちに元金と利息とをうけとるべし六ようてきの一千の金をくりて十千の金あるものよりあつ元いくまきもバそまりつものいくばくあるべてあるいあまりあるしめあるざるものよハそのまぞしとるべしとあるまバあるいづらあるとをべくとそのくらいさにおひやまそこまきてをを歯ハぐみをるこしあるべし三そ人の子おれの威光まそてりろくの聖あるつひとをつまきこまこよハその威光あらくこねよ聖一三國〳〵の民とそのまへよあつめ羊と牧

の綿羊山羊をうつくしくよきものと品りけり

三綿羊とその右山羊とのいづれもおんつの王右とそ

のようにおんたちが父よめぐみまきりのようにきりて世のくるめ

ちりみのさ汝らのようあるそのらまて國と繼よいまを

あまバ飢しきたるまよ飲せ渇らーしきよりまを食せ

旅せしきたれをやしらせ裸ありしきよりまを

夜せ病しきさきまを訪尋獄きたれ

ようあまバありまこうにおいて義のうまてよりまを

いくん主やうの主の飢しきとそて食せまて渇らきて

のまゝ
や主の旅せ
とてやゞせまうる裸ゆ
よ衣せ
や主の病まさ獄よりとうて主たき
さりしや四十王うてうまたいうんきたに汝らたづん
汝らぞうどうの兄弟のいうてちうさきのひとりよ
おこゐつるハをゐくちうまうおこゐゐひゝみり四十ひうまさ
のぶりにたうのういうん罰せうるづきのようれとうゐき
て惡魔とそのうひのうゐひうぶる犬うれ
よ四十ううまうバ飢ゝうたうまうに食せどかうさに
ゝうたにうまうのまうせて四十ひやゝうたにうれと

らせど裸なりしかたにまとて衣せを病まる獄にあり
しかたにまれと訪尋ざれバなり四四こうにおいてうまて
ちうそうへていんん主やいつ主の飢まるハ渇まる旅
まる裸まる病まる獄にありしと見て主につくざ
まし四五そのとき主にうまてうまてにいんんまたに
汝らにつぶんこのとちさきものひとりにおこなハざり
しハをあくちられまおこなあくぶりあり四六こられハ
かぶりあるを刑罰にいりてしきものハかぶりなきい
ちこいるべし

第二十六章

さてきさ耶穌このさまぐのうをいひおくりてその門徒よりひけること二日のちユハ逾越のまつりなんと汝らもまるるありきる人の子十字架につけらるんためなりと

そのころ祭司の士子と民の長老とちかやばいる祭司のそきの庭にあつまり四詭計をもつて耶穌をとらへくるしめんとくはだてり五いひけるは民のうちに亂のおこらんことをおそれ

ゆゑにまつりの日にはそれ耶穌べタニヤの癩

病のシモンの家にとゝまりさにせもある婦蠟石の器にあたゝさ没藥と耶穌にとりゝ耶穌食もとゝまりたその首にようけーうバハその門徒見ていぶりとゆみらの費のこゝハゆゑぞやゐそれらの没藥を賣バおゝくの金とえてまづきものにわたるべきものといひけるとゝ耶穌もゝそうまらにいひけるとゝにさうをとゝまるゆゑにこのとんをとゝあやまちをやゝまづしきものハつねに汝らとゝもにあるみたまゝとゝまれハつねにとゝもにあるにあらずこの没やくとゝまづ體にけーハ我のくうひりのふゝくゝあるせりゝまきとゝに汝らにつげん

天下いづくまでもこの福音のひろまらざるこのんなのあやまりこそ　その形見のくらべらるべし　十四

そのさき十二でしのひとりイスカリオテのユダといふるの祭司のもとにゆきて　十五　われうまとゆらるるとあらばなにとやいひまた銀三十しかれる約せりきこのときより耶蘇をうらんとてうりとうりて　除酵　ぐんのまつりのくるあの日にでし耶蘇にこれらをとりていひけるは　逾越　のまつりに食事せんとそれらにあるるのまたをそなるはいづくによせんとうるやを耶蘇いひけるは　十六　城下　にいりて何がしに

いとりて師いつるハるる時ちりつけバ門徒ともにをざこ
の食事を汝の家よりとべしといへ十九て那躰の命ぜ
ごとくしてをそこしの食事とをるべきり十日くれて那躰
十二てしきたに席より坐しいひけバ
きたに汝らたつぐん汝らのうちの一人ハ我をうらんかれ
らいとうまつひおのく耶躰よりいひいそけるハ主やうれる
ら三こたつていひけるハうれとうに盃より手をつくるあれ
とうをうん四人の子ハおのれよつをもるれ一ごとくぬうんもれ
ぐ人の子をうをとをそその人をそうをぐとひるを其の人をうまを

ぞりしくだかまの幸あるものとこ五まとゝとゝもとのユダとゝ
ていひけりハラビやゝれあるゝいひけハ汝のいつる
れまいひけハ汝の耶蘇ぐんぞとり祝しいのり
ごゝ六ハうまゝ食をゝゝゝ
て門徒にあゝていひけハ取てくゝへこれハゝゝゝ身なりまゝ
杯ゝゝゝり謝してうまゝにあゝていひけハ汝らこゝの
ゝゝづゝゝゝゝりのあゝ六そゝられ新約のゝゝ血ゝて罪とゆゝん
ゝゝおゝくの人のあゝゝゝゝゝゝゝ元ゝゝゝ汝らにつ
げん今よりのち汝らゝゝにゝゝゝゝゝ父の國ゝゝのゝん
日まゝゝゝびこの葡萄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うをとらふひてのち撒攪山にあがりそのとき耶蘇うまれ牧
ひひたハ今夜汝らうみうまれたつてつぎうさまんそハられ
ものとうさんと群の綿羊らうさまんとるされーうまどばかり
三うまどれよみがつりしのち汝らに先ざらてがりラヤにゆくべ
三ペテロうふて耶蘇よいひひたハうあるあるにつのてつぎ
うさまとしもれうるうどつまづうされまた一三耶蘇うまたいひ
ひるハまうこに汝よつびん今夜鶏なるまえ三汝三つび
うまをとどいそんペテロうまてこいひひたハうれハ主と
うたに死ともあるうとどとうとどいそで門徒もうるかく

いつり三八その〻〻耶蘇れらとともにゲセマネといふところに
いたりて弟子らにこゝにをれとすなはちこゝろをめぐらしてペテロとゼベダイの子とつれてうまれたみ
いつり毛ペテロとゼベダイの子とつれてうまれたみ
とすなはち三八そのとき彼らにいひけるハワガこゝろいたくうれ
きるこゝ死ぬるばかりなりこゝにとゞまりてわれとともに目をさ
ましをれ三九さてすこしすゝみ俯伏ていのりいひけるハワガ父よ
若なべくハこの杯をとをるせ給へどワガこゝろのまゝに
あらずこゝろのまゝにあらずこゝろのまゝなるなり四十とゝりて
門徒ニさとりそのいねるを見てペテロニいひけるハかくも汝れと

うたに一ときは目とまるところのあるべきぶんなり四十七ぶ
やうにめをさましうつれ魂ハうつゝとも肉體ハ疲さ
あり四十八ぶ
さびしきいのりてハ父よりこの
さづけとのまどゝてゐるとゝろ
ようちとべし四十九ぶ
目のつゐしゆゑなり四十ぶ
めをおもゝこゝをとゝひていのり四十一ぶ
ていひひとハ今ハいまてやをあるよ時ゝ人の子つゝ
人の手にまもゝなり四十二ぶ

まことのちごとおぼしめしてうちこころ十二の二人刑
殺し挺しとりたるおろかくの人々くしたに祭司の
民の長老ちりこそれり四只那鮮とまことにあいづ
とりてうるが接吻(キッス)せんものこそれとくまこれとと
いつり四九ちに那鮮ちこそりて言ひそれは
接吻(キッス)せり四十那鮮ちまこいひるハ友ちんのうあるまこと
やこうにおりてうまこそみ手と那鮮ちけてくこうり
五一ちよ那鮮とまこにとるものひとり手とのぐ剣とぬき祭
司のとものとちそのの耳と削ぎせり五二ちこにおいて

耶蘇うまれたまひしハ汝の劍とおもふてこれ
ばとて劍をとるものハ劍にてうしなふべし五三 されハ今十二萬
余の使者をとられ賜ふんとてまことに父よりあ
ふぐとい、おもふ五四 ちゝハいつて聖書に應じてこそや
いつまでもあれかくあるべきにあらぬ五五 そのゝち耶蘇
人々にいひけるハ殺さんとてゆるしたまへ
ぐゝにされとゝ、よろこぶやされ日ぐに汝らに
坐してそゆゑいへども汝らに共さりみ
ぐらこれうる預言者のとるされしよかやうにたまり

こゝにおいて門徒なる耶蘇をくるべきやいなやとらくらくりの主子と長老のあつまりしこゝろの祭司のときカヤパへこれをひきわけるべきやいなやとくるべきの庭まで耶蘇をとらへてひてゆくりそのありあまさと見んとして僕をとらへた坐しくり元祭司のときたち長老と全公會と耶蘇をこゝろまんとつくりの證據とりむきとも元を卒ふくのいつくりの證據人をれとも真きをのちたいつくりの證據人をりていひけるハ六この人ハまことに神の殿をこゝろて三日のうちにこゝをこぼんといひしことあり六二祭司のとき

ふたて耶蘇こいひけるハこゝろあるやこの人ゝ汝の證據を
ようハあんぞや六三 耶蘇默然うり祭司のとくこゝろてれ
こいひけるハ汝キリスト神の子なるや否と治神こよるあんぢ
とゝくせてこれらこつびもあんた四 耶蘇こいひけるハ汝
いつぞゝくされども汝らこつびんこのち汝らハ人の子權勢
の右こ坐して天の雲このりてきたると見べし六五 こゝこ
おいて祭司のときその衣と裂ていいけるハこの人けづを
こゝをいつりあんぞりの證據とりもんやこゝこ汝らも今
そのけづをきゝたるこゝをこゝり六六 いかゝ思ふ答て

うまれ八死よりあがりていまこゝにおいてうまれたるその酔に
つゞくしやく拳をそうちあるいひ八
六キリストよ汝をうつるのハれぞとこゝろまつに預言せよ六ペテロ
内庭よりにひとりの下女きたりていひけるハ汝
もガリラヤの耶穌とともありき 十七ペテロもべての人のまへにこそ
みていひけるハ汝ものいつたるどもいで門ぐちにいる
るまでひとりの下女うまを見そこにとるものよりまく
この人も耶穌とともありき 十八ペテロまたこの人をしら
ぬとちかひてゞありき 十九ものゝくしばらくこゝろ

ものをみるりペテロいひけるハまことに汝もそのともがらの
ひとりなりいつくしまれハ汝の方言に汝をあらはせり
おいらペテロのもとらり且ちらてまもなくその人とちかとをいつたに
鶏やがて鳴しハ主ペテロ耶蘇のこと葉に鶏かなくまへ
に汝三度われをしらぬといふんといくたびとおりの外に
いてかなしこまるね

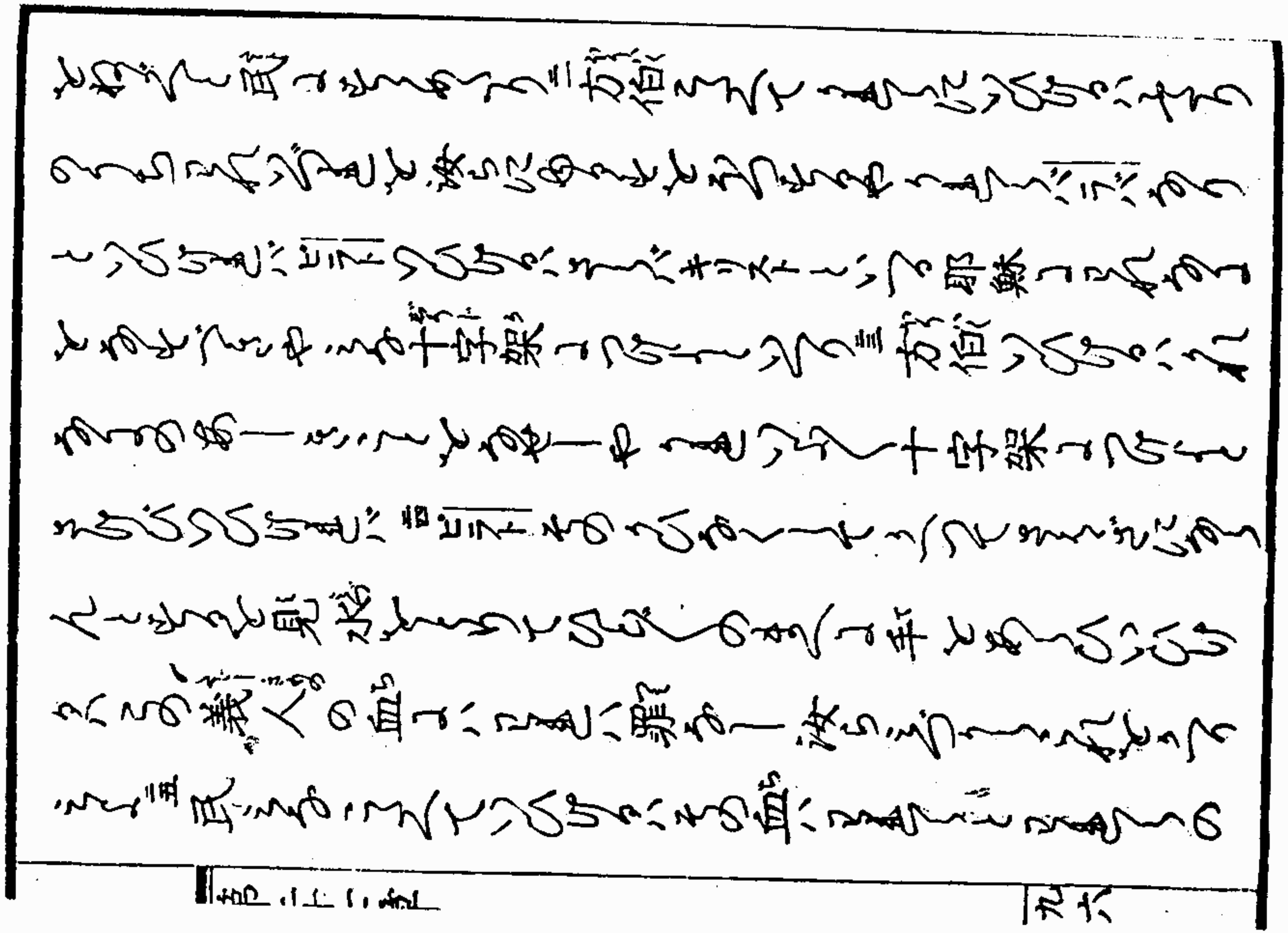
第二十七章

平且はありてをそべて祭司のをさち民の長老ハ耶蘇を
つなぎてこれをころさんとそもたいハまりをもをそたうまを

縛り曳て方伯のポンテヲピラトコヽせりこゝにおいて
那穌とゝせーユダハ死コヽぢめ[illegible]れーと見て悔[illegible]その銀三十
を祭司のところへ長老コヽろへ[illegible]て[illegible]いひけるハ無辜の血を
つゝーてゝいひけるハ[illegible]れくにおいて
あんそやこゝろづゝーてゝ五ユダ銀と殿コヽへ[illegible]をそさり往
てこゝろづゝ縊り祭司のところへいひけるハ
ハ血のあゝこゝれバ賽錢箱コヽへ[illegible]にこゝろこの
銀とりつて實旅客とこゝろむるこゝあゝ陶工のこゝひとゝひさり
ゆゝこゝよそこゝのこゝとといまにいゝこゝて血のこゝ[illegible]こゝ

ゝりゑゝにおいて預言者イエレミヤよりていそまたれ
ら八直積られ一のもとをくちイスラエルの子ゝりねづ
あゝゝの銀三十枚ととりて主のゝれゝ命ぜごとく陶工のゝ
けとかゝてゝめゝこれとあゝゝしいゝゝかるゝりてさて耶蘇方
伯のまゝゝゝゝゝ方伯耶蘇ゝゝていひけゝ汝ハユダヤ人の王
ゝゝゝゝ耶蘇ゝゝれゝいひけゝハ汝がいゝゝゝゝ　祭司のゝゝゝら
長老ゝゝまゝをせあ訟ゝゝるゝゝゝゝゝゝゝにおいてピラト
ゝまゝゝの人々汝ゝいゝゝやゝゝる證據ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝる
ゝいひけゝゝ方伯いゝゝあやゝめゝゝゝゝ耶蘇一言も言ゝゝゝゝ

こゝにぎうり十五さてこのきうりの日ゝく方伯民のねがひたちを
てひとりの罪人とゆるものゝ例ありそのゝさバラバしいつる
ひとりのゝゝゝゝ罪人あつまりけるバ民あつまりしゝゝピラト
まゝたいひけるハバラバゝあゝハキリストといつる耶蘇をゝゝゝ
放らゝれとゆるさんとゝうつもりやこゝ娼嫉よりて耶蘇と
つゝもしゝゝゝゝ方伯吟味所ゝ坐せしゝゝその妻
ひつゝゝゝけるハその義しゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝな
れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



とゝ[illegible]かゞべ[illegible]らんにおそバラバとゝ[illegible]ゆゝ[illegible]　耶穌と
ひとりして十字架よりけ[illegible]ん[illegible]ゝ[illegible]ゝりモ[illegible]こにおいて
方伯の兵卒　耶穌と公廳よりきつゝとて組中とゝ[illegible]ゝよびゝ[illegible]せ
六そのゝ衣をくゞぶてひゝ[illegible]きのうく着とゝ[illegible]せ棘のかむり
ものとあゝてその首よりゝ[illegible]めゝく葦と右の手よも
ゝせ且そのゝ[illegible]まゝよりひざまづき嘲弄ていはゞユダヤ人の王
やとゝれゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝよ唾ーそのゝ[illegible]とりてその首をうち
三ゝゝを嘲弄ーおゝりてその外衣をとゝぶりゝ[illegible]のゝゝもと
ゝゝ十字架よりけんとそゝ[illegible]とひゝきあげりいづるゝゝ[illegible]子

の人シモンとゝるのにあひまに強てその十字架を負せり
三三 まゝゴルゴタといふところにきたれハ 三四 醋に膽とあゝなせし耶蘇に飲
ませんとせしに飲
てのむとこの時ぐりし 三五 さて耶蘇を十字架につけ一のちに
預言者のこゝぐにうまつゝぐひよりこゝろもとゝもちまつ
外衣と鬮いとれ一よりうまつて鬮びきしてその衣を
まゝちゐ 三六 つゝりのこうに坐して耶蘇とまもりまつこ
もハユダヤ人の王耶蘇なりと罪狀標をその首のうへにたて
まつる 三八 そのとゝもにつゝりのぬすびとひとりハ耶蘇の右ひとりハ

左のごとく十字架より元往來をとりの耶蘇
をけし首をとりていひけるハ殿をこぶちて三日のうちこと
をこるのやうづくとをけよ汝神の子なればとくに十字架
ゆりをとりよ四祭司のとくとちぢ士子や長老もまたおなじく
嘲弄していひけるハ人をたすけしがゆりが身をすくることあた
ハぬし イスラエルの王なるものなればいまに十字架をゆりくだる
べしさればわれらまことを信ぜん四皇ハ神よりたすけられ
ハ神の子なりといひしゆへハ神われをいつくしまんがためにまたを
けくべし四皇ともに十字架をつけられし盗賊もおなじく

耶蘇とのたまり四五ひる十二字より三字までその土地にあ
くらくくきりぬ三字ころ耶蘇大聲よばくてヨリヨリ
ラマサバクタニといつりこまを譯ぐ神ぐ神をんぞまま
とまてしまとなりかくしたにちしものさてうまて
ヨリヤとよぶきいつやぐそのうちのひとりくまを
て海賊をとり醋をくませたつひて耶蘇のまをとり
のそのかうのいひけるまてよヨリヤきりてれをとを
くりやいるやを見ん耶蘇まさ大聲よばくまてその魂
とくちぬうよ殿の戸擂上より下までとひてとり

よりまさ地ちゃうの磐さけ墓ひらけそぐるい〇てる
信者身おおりくよみがえり耶蘇のてこがてしのち墓とそ
聖城よりておりくの人よあらくれり百夫の長ちゃうに
耶蘇をまするの地震おびありしことを見ていとおそれ
てこれはまことに神の子なりといてりガリラヤより耶蘇よ
もてどってつくておりくの婦くるふのぞみてゆりそのう
ちよりマグダラのマリアとヤコブヨセの母マリアゼベダイの子の
母とありしを日くれてアリマタヤの富人をもくちでしなる
ヨセフと名つくるものこれりてピラトよりあさ耶蘇の

屍とこひしにピライトもそなとせと命ぜり[五九]ヨセフ屍を
とりてこれを泉につみ浄こまと磐よりりしおのれのあら
らしき墓よりおきき墓の門よりおりひるる石とりのぐして
さりぬ[六〇]マグダラのマリアとかくのマリアと墓のひしよりまぎ
てそこに居こり[六一]祭のそなへ日の翌日祭司のもとにそこ
とパリサイの人ピライトよりつどひそいひけり[六二]主やの偽者
の存こりさ三日の後よみがえりんといひしとおりしよおそ
くハそのでし夜こりこまとぬをして民よ死せしより
よりこがまりいそんを命じて三日まで墓をしめ

させよ。さるあくハのちはまだくハ先ずりいやまとべーピイト
まったいひげるハ汝らよりするものあるゆゑそなたに
かつあさせよ。ゆゑくちまつあゆゑそして石に封印しまつも
のとして墓とりあさせ

第二十八章

安息日をすぎ日曜のくだりのくだりの日夜あけぐさにマグダラ
のマリアとかのマリアとその墓を見んとそこへきたりしに
おほひなる地震ありて主のつかひ天くだりきたりて石と
脇へうちまろばしてその上に坐せり。その容貌電

のごとくその心も雪のごとくなりし四まりをのれ
をにかりて五つのごとくありぬ五つのひこう
へて女コいひけるハ汝らハおそろしくなれ十字架よりひられ
耶蘇とこゞ毎ごとに見ればハこゝにまき
どいふおとこなまバそのひごとくにこゞくまりこゝろ
て主のおとれ一ゝこゝろと見ましまくそのでに死
りゝみごのりうよ汝らに先ぶらてガリラヤコあさかこ
まて汝らハまを見んとつぎよハこゝよ汝らコつぎそをえる
ゐそれあゞしもとゝろびゝく墓とゝりそのでにつぎ

そくりめりゐ門徒よつぎんとめさーーーにこそ耶
鮒まてたあふてやそれよこいひけるよんなをみ
そのあーといでさ拜せりナうにおいて耶鮒うまてくたひ
けるおそるるあれさりてガリ鮒やよめけかーこまそれを
えんとヨゴ兄弟よつぎよ土とんなあくとさこそよまものの
のうち城下よいりをぞてありーこと祭司のとそをもよ
つぎーゐ土まりと長老あつまりてくりはあくの
銀と土卒よあふていひけるこそまていーーこそのでー
夜こそりてこまとぬとありといそよ西このこと方伯にを元

みづからまたにをめて汝らこハこゝろづひなゝ
めんまつ銀をとりていひやあられゝごくせりこの
話ハユダヤ人のうちに今日ようるまでいひひろめらま
ゝり十一のでゝガリラヤようさ耶蘇の弟たに命ぜゝ
山ようゝり耶蘇を見て拜しゝりされどもうゝぶひゝのも
ありゝさ耶蘇をうゝてゝまつたにゝりそいひけりハ天のうち
地のうゝのをべての權をゝれたまたまつ九もろようさ
て父と子と聖靈との名ようまつに洗禮をわぐこゝ
ヰヲをべて汝らに命ぜゝてとまれとをべて萬國

百二終

の民と門徒となることを見れば世の末期まで つたに次ら
とゝにあるべし 亞孟

本書の底本としては、山梨英和短期大学「門脇文庫」所蔵本を使用させていただきました。

近代邦訳聖書集成⑭　新約聖書　馬太（マタイ）伝

1873年　原本発行
1996年8月13日　第1刷印刷
1996年8月23日　第1刷発行

J.C.ヘボン 訳

発行者　荒井秀夫
発行所　株式会社　ゆまに書房
〒101 東京都千代田区内神田2-7-6
電話 (03) 5296-0491 (代表)
振替 00140-6-63160
印刷　互恵印刷株式会社／製本　東和製本株式会社